

薩 めぐみ プレス記事

昭和22年9月27日第三種郵便物認可 復刊第44巻 第9号(通巻1007号) 平成2年11月15日発行(毎月15日1回)

早稲田学報 '90 11

MEGUMI SATSU chante J.PREVERT



シャンソン歌手 薩 めぐみ



薩 めぐみ(本名)、1948年バレンタインデー、札幌に生まれる。中学、高校と札幌藤女子、早稲田大学商学部卒。在学中にシャンソン・コンクールで優勝、すぐにプロのシャンソン歌手に。卒業後、渡仏。演劇・パントマイム・ジャズダンスなどを習い、半年後にフランス語でフランス人のために歌い始めた。「シェ・マ・クジヌ」、「ヴィ・ラ・DEST」、そしてエッフェル塔の中やフランス号の船上で歌い、1975年「ラ・ヴィエイユ・グリーユ」での3週間のリサイタルに成功をおさめる。以降数々のリサイタルを開くとともに3枚のLPをフランスで発表しヨーロッパで好評を博す。今回、札幌の皆様のために仏大統領の甥フレデリック・ミッテラン氏が“地獄の時差ボケ”、薩めぐみが“私の個人広告”を作詞し新曲として披露される。

MEGUMI SATSU DU VENT A LA FOLIE, Paris

「薩めぐみ パリより風狂の世界」

■スタッフ: パトリック・ヴァソリ(キーボード)/ランツ・ディクソン(キーボード)/ジル・ヴジョー(音響)/ヴァンサン・ジャロ(照明)/フリップ・フォンテーヌ(舞台監督)

LE MONDE

「メグミ・サツ、レックス・クラブで私たちの魂に“ジャック・ブレヴェール”を永遠に刻みつけた。」

LE FIGARO

「美しい日本女性が、シャンソンを通じてフランスの文化を擁護してくれた。」

GAI PIED HEBDO

「彼女の歌う“ジュ・メーム”は、僕たちの現代版“愛の賛歌”だ。」

PLAY BOY

「彼女はダイヤモンドの声で、私たちの心を犯し、魅了する。」

AGENCE FRANCE PRESSE

「メグミ・サツは日本の“青い天使”(デトリッヒの映画のタイトル)」

PAROLES et MUSIQUE

「彼女はフランスのシャンソン界で驚異的な存在になりつつある。」

CHANSON MAGAZINE

「メグミ・サツはアートのディヴァ(歌姫)」

彼女の公演の前好評は、すこぶるよかった。仏の一流新聞、雑誌が、軒並み取り上げた。一見、日本ブームの関係かな、とも思われそう。しかし、エキゾチックなだけでは、こんな取り上げ方はしない。何故かな、と思ったけど、ステージを見て納得した。全ての曲をフランス語で歌うから仏人に意味が通じるのはもちろん、そして、仏語で歌い喋る外国人に当たりが良いのは昔からであるけど、彼女は、パリを自分の生活圏として確実に、環境化し、呼吸していた。だから、矛盾をも矛盾そのままとして見つめ、その視線が歌にスパイスを利かせている。コクトー、ブレヴェール、ボードリヤールといった、あまりに仏的な詩を、彼女は100%彼女流に表現する。そこで、聴き手は、彼女の音声を通して、言葉の意味ではなく、彼女の詩そのものを受け取る。日本の女性歌手がそこにいるのではなく、《薩めぐみ》が存在するだけなのだ。それかどうか、99%が仏人観衆という中で、彼女への拍手は、仏人歌手に対すると全く同じ暖かさのものであった。木立玲子(音楽ジャーナリスト)



★めぐみの歌は力強く、深く、ふるえるように街へ、広場へ流れていく。ピアフ？それともディートリッヒ？……めぐみはその双方であって決して一方ではない。

(ジャンヌ・ウォームス)

★美しいめぐみ。ひとつの魔術。黒のспанコールの衣裳……その声は魂に触れる。ピアフの見ごとさ、グレコの女らしさ……「枯葉」「マッキー哀歌」などをめぐみは再発見させてくれる。

(コティディアン・ドゥ・パリ紙／ベルナール・マビユー)

★ブルノ・コカットリス（オランピアの所有者）はめぐみの歌を聴きに行っただろうか。彼女は日本人……だけど、フランス語で、フランス人でさえ最も困難なレパートリーをこなす。ディートリッヒの低音、ピア・コロンの激しさで……。

(フィガロ紙／P・キャリエール)

薩めぐみ 1948年・札幌生まれ。早大在学中にシャンソン・コンクール優勝、70年10月からパリに住む。シェマ・クージーヌ、ヴィラ・デスト、バック・ボー・フランスなどで歌い、3月に5年ぶり帰国。今回のショーはカフェ・テアトル「ヴェエユ・グリュユ」（3週間満員）で開いたものと同じ。

「日本の本格派に」 恩師(石井好子)も絶賛

帰国の薩めぐみ 礼出身

30年代に聴衆酔う

大成功の東京リサイタル

当日、会場に姿を見せた恩師の石井好子さんもほんとうにうまくなりました。この人は日本に本格派を立派に受け継いで行くでしよう」と絶賛を惜しまなかった。

ほとんど小道具のない黒い襟一枚を背に、パリのノミの市で探求めいた黒いドレスのロングドレス、帽子もドレスのスパンコールもやはり古い時代のものという。

薩は昭和十三年札幌生まれ。早大藝術部在学中、昭和四十二年第五回シャンソン・コンクールに優勝し、そのまもなくデビューしたが、まもなく四十五年秋に渡仏、この三月に帰国したばかり、リサイタルのプログラムは、パリのキプフェ・ワグネルと同一内容だ。

初心を通した地味なデビューで大成功をおさめた薩めぐみは、改めて意欲を燃やして、本年末は再びパリに行く予定だが、再渡仏間本道公演も企画されている。

ステージでの薩めぐみ「東京・西武劇場で



めぐみ
ある種の陶酔

リュファス、アレキ、ポルタル、ズックらの後もうけて再開されたキャス・テアトル「ウエエ・グリーヴ」の舞台に居るのには、遠い日本からやって来た愛らしく、脆そうで、そして美しいめぐみ。

一つの魔術、私は今も彼女が目に浮かぶに残る。青白い光の束が彼女の悲劇的なマスクに近づき、彼女は螺旋階段を降りて来る。人形のような彼女の身体に黒いスパンコールの衣裳がまとという。ピアノが繊細な指使いで、クルト・ワイルの高をかなた始める。このようにして奇跡は実現されてゆく……

めぐみは神な声を持ち、幅広い音域、低い声、優しい声、人の心と通じようとする声、激しくそして広がりをもたせ、彼女は人の魂にそっと触れる、テトリッヒの叫ぶ声かどうであるように。

彼女は感嘆させ、整かせ、感嘆の声をあげさせる。流行と云うものの安易さに流されず、祖国の民謡も捨てず、彼女が我々に示してくれるのは彼女が最も好むテキスト。フレヒト、フレヴェール、デスノム、ポルタルそしてジャン・コクトーの語り唄「メイドのアレー」と語るまでの洗練さを見せる。我々には知らぬ共通の趣味を見出す。

これらのクラシックなものに新しい趣意をこめ、彼女自身の個性を透け込ませる。存在する表現の多様性を感じる人には何れも力わざ。

ピアノの足音さ、グレゴの女らしさ、青い天使の魅力。「枯葉」「マキヤ哀歌」「ビルバオソング」などを見せる喜びは、また見られることとした手際も容易に消えてしまう。

拍手喝采なしに彼女を引き下からせてはいけ
ない。
とびさし上等の質を持ったひととき。

ベルナル・マビユ
(コティン・アンド・パリ紙)
1975年2月25日

LE RENOUVEAU DES VARIETES

MEGUMI

Une certaine ivresse

Après Rufus, Areaki, Portal, Zine et bien d'autres, c'est Megumi, petite femme fragile et belle arrivée de son lointain Japon qui aujourd'hui habite la scène de la « Vieille Grille », café-théâtre enfin ouvert.

Un enchantement, je la vois, je l'entends encore. Le faisceau blême d'un projecteur accrochant son masque tragique de comédienne, elle descend l'escalier en colimaçon, une robe de lamé noir moulant son corps de poupée. Le pianiste entonne les premiers notes de Kurt Weill, tout en doigté et en finesse. C'est alors que le miracle se réalise.

Megumi possède une voix rare, aux registres variés, grave, douce, enveloppante, intense et étendue, elle vous caresse l'âme, ressemblant étonnamment en cela à la musique

vocale de Dietrich. Elle émeut, surprend, et fige d'admiration. Ne cédant en rien aux facilités de la mode, défilant son folklore natal, elle nous apporte les trésoirs de ceux qu'elle aime par-dessus tout : Brecht, Prévert, Desnos, Paul Fort, et pousse même le raffinement jusqu'à dire « Anna », « la Bonne », une chanson parlée de Jean Cocteau. Nous avons les mêmes joies.

Dormant un ton nouveau à tous ces classiques, elle les imprègne de sa personnalité ; un tour de force si l'on songe à la multitude des interprétations existantes.

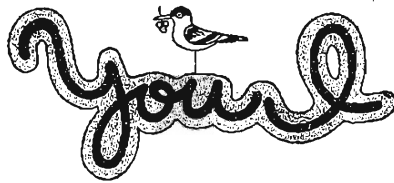
Les scènes de Port, la féminité de Gréco, la charme de l'Ange Bleu, l'intense plaisir de retrouver « les Feuilles mortes », « la Complainte de Mackie », « Bilbao Song », gommèrent aisément quelques maladresses encore apparentes. Ne la laissez pas repartir sans aller l'applaudir. Un moment d'une qualité exceptionnelle.

Bernard MABILLE

La Vieille Grille, tous les soirs à 22 heures, jusqu'au 2 mars.



▲ 後援者を貰って出た音楽評論家、吉見佑子さんと語りあう薩めぐみ



「詩人の魂」を掃さる歌い手が、時にはいるものだ。シャンソンの代名詞になっている「枯葉」や映画「天井桟敷の人々」の名シナリオを残した高名な詩人、ジャック・プレベールは四年前に亡くなったが、生前、日本人のシャンソン歌手を気に入り、「彼女のために書いた詩」を書いてくれた。その歌手とは、薩めぐみ。日本ではほとんど無名だが、十年前に渡仏して以来、本場の聴衆から高い評価を受けているシャンソン歌手である。

さて、このプレベールの十編の詩がさきごろレコード化され「ジャック・プレベール/薩めぐみ」

滞仏十年の薩めぐみ
プレベールに詩を贈

芸能

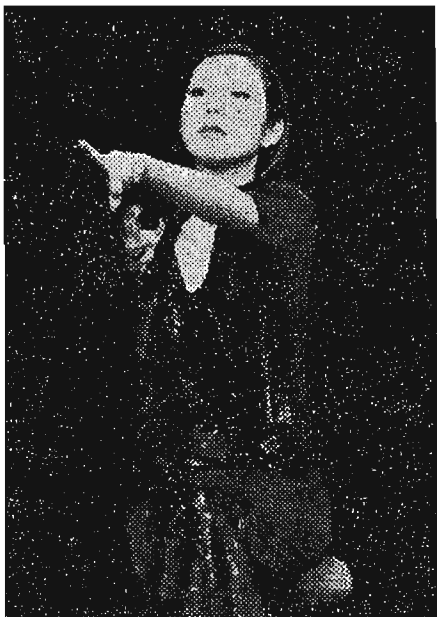
化芸術会館でシャンソン・リサイタルをひらく。

彼女は、加藤登紀子を世に出したシャンソン・コンクールの第五回(44年)優勝者。早大を卒業した四十五年秋パリへ渡り、ミレーユ・マチューの先生でもあったジャフェ・テアトルで、前記のフィ

仏紙が絶賛…薩めぐみ

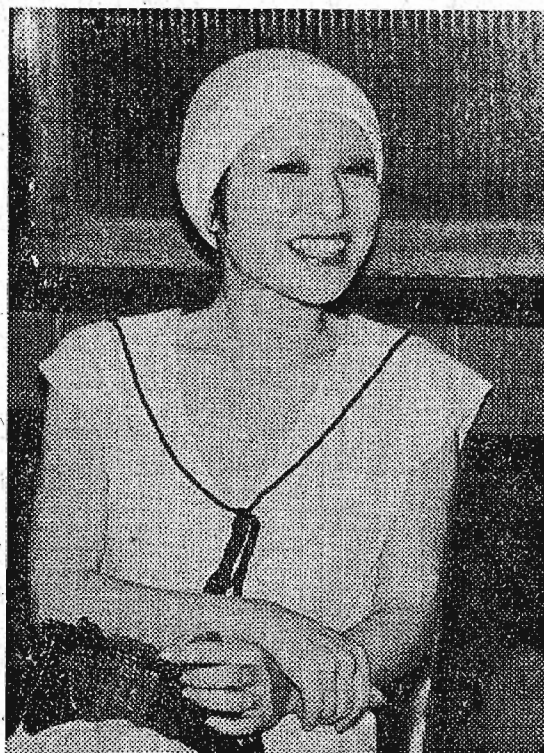
帰国初リサイタル

「彼女は日本人だけど、フランス人でさえもとても困難なレパートリーをこなす。ディートリッヒの低音、ピア・コロンボの激しさで…」(フィガロ紙)と絶賛された薩めぐみ「写真」が帰国、東京に続いて二十二日夜、京都府立文



ヤン・ルミエールについた。そしてピアノの伴奏もしたピアノスト、クロード・ローランを知り、一九三〇年代の古きよきパリの作品を好んでとりあげてきた。それがコクトーであり、ブレヴエール、フレヒトといった作品で、フランスでもポップス隆盛の陰に押しやられて歌われることのまれなシャンソンを、自分のものにして注目を集めた。帰国前に三週間のリサイタルを開いたのはヴィエイユ・グリーユというキ

意欲的な薩めぐみ



フランス語で 本格派のシャンソン

22日・京で「リサイタル」

二十二日にシャンソンリサイタルを京都府立文化芸術会館で開くイタルを開きました。日本でもリサイタルを開きましたが、反響が十分感じられます。

その京都公演の抱負などについて次のように語った。

「わたしのシャンソンは特殊なのですが、一九三〇年代の詩的なムードを表現したいと思います。パリ

時代的にも情感的にも一致しますので、大いに歌って皆さん方と一緒に楽しみたいと思っています。

わたしはピアノの伴奏だけでなく、そしてオール・フランス語で歌います。お客さんには解説書をおくばりますから。また舞あいに解説もはさんでいきます。

本格派のフランス・シャンソンを歌うという彼女、京都でのリサイタルに意欲的である。

久々に日本でレコード

F・ドゲルト作詞・作曲 「風ノノルマンディー」

渡仏したころの思い出の曲

いまテレビドラマの主題歌

フランスで活躍する札幌出身のシャンソン歌手、薩めぐみが久々に日本でレコードを出した。TBS「日曜夜のテレビドラマ」『天の料理番』の主題歌として邦楽の間にも流れている「風ノノルマンディー」(ジャパンレコードから発売。かつて、パリに渡ったばかりの薩が、作詞・作曲家で歌手としても知られるランソワ・ドゲルトから贈られた思い出深い曲で、異邦での感傷、人との出会いを情感こまかに歌っている。

薩は、これまでフランスで二枚のアルバムを出している。一枚目は、映画「天井桟敷の人々」の脚本とシャンソン「枯葉」の作詞で日本でも有名なシニール・レアリスムの詩人、故ジャン

薩めぐみ



「自分で納得できるものを」と語る薩めぐみ

無名時代、には日本でもレコードを出したことがあるが、フランスで成功してからはこの「風ノノルマンディー」(歌詞はフランス語)が初めて、「十一年前にデビューしてから五年間、くらはアンコールなどでよく歌ったのが、最近、引き出しにしまっていた曲。番組

の相当者に聞かされたところ、テーマ曲にぴったりだというわけだ」と喜ぶ薩。薩の仕事にのぞむ姿勢は厳しい。「私は不器用な人間です。だから、あらかじめ決められたローテーションの中で仕事をするのはダメ。新しいアルバムのジャケットも、自分が納得できるまで何カ月も待つというくらい、もちろんレコード会社がカンカンになったのは向こうでも同じ。完全主義者ではないけれど、自分の納得できないものを売ったり、聴かせたりはできません」と言い切る。

そんなかたくななまのプロ意識が、生前のプレバールを薩の熱烈なファンにさせ、「ジャンソンの新しい擁護者」と本場のフランスで高い評価を得ているゆえんでもあるのだ。

一文無しでも陽気に

パリのシャンソン歌手 薩めぐみ「風ノノルマンディー」ヒット中

「私はパリのせいたな一文なしの」輸入盤レコードが評判を呼んでいるシャンソン歌手の薩めぐみは、めづみは歌が日「天の料理番」のテーマソング「風ノノルマンディー」(ジャパン・レコード)がラジオで話題になっている。

薩は昭和四十二年にシャンソン・コンクール優勝、この道に入った。「難しすぎて、やむを得ず、これが好き」と昭和四十五年には何のシヤも頼らずにパリに移り住んだ。

パリのシャンソン界で薩の活動



渡仏して10年、ぜいたくさを失わない歌作りを続けている薩めぐみ

のレコードだが、当人にヒットさせられないうちはな。入問、ビークを作った後、おひしめがなで、い、と、ずっとマイペースで「私のシャンソン」を追求していく気だ。

レコード制作も二二年た

ジャズとシャンソンと

西武劇場 催し二つ

東京・渋谷 西武劇場での催し二つ。

マジック・イン・パルコ・ジャズ・クラブ「ロフロイ」との共同主催で二十六、二十七日の二日間、同劇場でのジャズ・コンサートは初めてで、安田南、龍淵ユカからボーカルのほか、に佐藤隆彦(ピアノ)らが出演、スイングするジャズを聴かせる。



薩めぐみ



安田南

▽薩めぐみ・シャンソン・リサイタルに優勝後、五年前に渡仏、本場で「修業」してきた薩めぐみ

の帰国初公演で、二十八、二十九日。かつてエディット・ピアフの伴奏をしたクロード・ローランのピアノ伴奏によるステージだ。

聴いてください オリジナル曲

「『枯葉』など2曲を除いては、すべて私のオリジナル曲を歌います」と話すのは、札幌出身でパリ在住のシャンソン歌手薩めぐみさん。9月25、26日に札幌グランドホテルで開くコンサートの準備のため里帰り中だ。コンサートの初日は



ディナー形式、2日目はシャンパン付きの肩の凝らないものに。「父(薩一夫・道観連会長)から、パリばかりでなく日本でもコンサートをやれといわれまして。今年は父のジャーナリスト生活50年にあたるので」と11年ぶりの札幌のステージを務める。ロック調もある、ざん新なシャンソンを披露するという。

四年ぶりパリから帰国

薩めぐみがりサイタル

シャンソン歌手の薩めぐみ（札幌出身）が四年半ぶりにパリから帰国、二十八、二十九の二日間、東京渋谷・西武劇場でリサイタルを開く。パリでの修業の成果を披露するわけだが、「これからいつまでも歌い続けるつもり」と意欲的だ。

障は早大在学中に第五回シヤンソン・コンクール（昭和四十三年）に優勝し、四十五年秋から滞仏、この三月に帰国した。その間、最初の二年は語学や演劇、モダン・ダンス

がかりがつかめたため、前時代のスバンコールを、古着屋い。「あまり働かず、パンら心に温めていた東京でのリブを探し歩いてみつけた。伝とブドー酒だけで食乏して

修業の成果を披露

修業の成果を披露



パリのキャフェ・テアトルで歌う薩めぐみ

伝統派に徹して

人を売りものにせず、自分がいいと思うことを押し通して理解されたこと。また新しい才能を自ら発見するのに生きがいを感じている人たちを知ったことです」という。ジョルジュ・ムスタキが、めぐみはなかなかやる、と人に語っていたのを伝え聞き、ファイトをかき立てられた、とハスキーな声で感激を語っていた。

の勉強に當り、二年目からは草大で同級生だった人と結婚した。二月に、セーヌ河岸の学生街にあるキャフ・ニ・テートルでリサイクルを三週間にわたって開き、仕事の足間にわたつて開き、仕事の足

ノミの市で見つけた帽子と絹のデシンのロンク・ドレスは黒々くめ。作られてから五、六十年は経過していると

た、という。舞台衣装も一九三〇年

「純派」に徹し、アズナブル、アダモ、マチツらの大衆的な歌は「それを歌う皆さんにおまかせして」コクトーやプレヒト、プレベール、サティといった詩人、作家とクラシック派作曲家の作品が多

も、自分に合った場所で歌いたい」といわずとも思える姿勢だ。

バリでは日本人とはほとんど付き合わず、フランス人、ユダヤ人芸術家と接触していた

よ。最大の収穫は「日本

う。前売りの売れ行きはいい
ようだ。「北海道人として國
太く開拓者精神を求めてきた
私です。チャンスがあれば道
内でも歌いたい」ともいう。
半年後にはバリに行くが、今後
は日本を本拠にしたいそつ
だ。

薩めぐみ追悼

先 断つておこうと思うのだが、
今回は、いわゆる「現代音楽
ネタ」ではない。

とはいえ、わたしにとっては「現
代音楽」と呼んで無難ではないも
の／＼なので、敢えて、である。
それなりに必然があるのだ。そして
この文章はいまさらわたしの個人的
なにかかわってくる。

薩めぐみが去る10月18日、パリで
亡くなった。喉頭癌。48年2月14日、
つまりヴァレンティン・デールの生まれ
だから、62歳、か。

この人の名を知っている人は多く
ないかもしれない。

いわゆる「ジャンソン」の歌い手
である。
札幌に生まれ、早稲田大学商学部
在学中にジャンソン・コンクールで

創者「セゾン文化は何を夢見た」(朝
日新聞出版)には、何人か、セゾン
文化とかかわりのあった人たちにイ
ンタビューし、コメントをつけた文
章が載っているのだが、わたしの名
もそこにある。それも「客」の立場
として。アール・ヴィヴァンがわた
しの「形成」の部分になっているの
は確かだからだ。

アール・ヴィヴァンに通っていた
あるとき、そこではあまり見かけな
い類いの音楽がかかっていた。うた
である。フランス語である。どうも
「ジャンソン」にくれそうだった。
かしら。サウンドが違ふのである。
自分の知っているエディット・ピア
フからシルベール・ベコ、コラ・
ヴォケールあるいはレオ・フェレと
は明らかにちがったサウンドだ。し
かも、フランス語の発音がちがっ
ちがう。

それが薩めぐみだった。「Megumi
Satsu chane Prevert」というLP。
ジャケットはとてもシヤレている。
シヤレているけれどもまるで派手ま
はない、モノクロームに近いデザイ

入賞。70年に渡仏し、以後、居を定
めたのがフランスだった。
高校時代、わたしは池袋の西武デ
パートにいたりびたっていた。
いりびたっていた、というのは正
確ではないが、週に一度くらいは学
校横断に寄り道をしていくところが
あった。当時、12階にあった西武美
術館。そしてその脇にあった「アー
ル・ヴィヴァン」(Art Vivant)である。

その名を知らずとも、いま、想
比せにある。そのとき、わたしは
コンパニ、東京都現代美術館の
Nishi X10、東京文化村のNishi
現代、オペラシティのNishi
ほか、仙台や水戸にもこうした「ナ
ディフ」系列の、現代美術を中心
としたショップがあるので、もしか

すると「あそこか」と思われる方も
おいでだろう。http://www.nishi-
com/shopinfo/shoplist/index.html
その「オリジン」がアール・ヴィヴァ
ンだった。
そこに行く、海外の美術街が
あった。現代音楽やフリー・ジャズ
のLPレコードがあり、ものによつ
ては楽器もあった。70年代後半から
エリック・サティが少しずつブーム
になったのは、ここでずっとレコ
ドがかけられていたから、と云つて
もさかいてはならないだろう。

現代音楽のコーナーのアドヴァイ
ザリー存在だったのは「柳登」で、わ
たしはこの実験的な作曲家に教えら
れ、店の初日から足をむける饅頭に
馴染んだ。
一冊はアメリカ合衆国での滞在

楽があつたがゆえに、それを情報
として流していた。エリック・サティ
が、ブライアン・リッパが、あつ
た。ジョン・ケージがあり、オプス
キエフ・レーベルがあつた。クルト
ヴァイルがあり、ヴァーゲン・レー
ベルがあつた。ステイヴ・ライヒ
が、フリーリップ・グラスが、武蔵野
が、一冊は、高橋悠治があつた。
若野公昭はジャケットを見、音楽
に耳をかたむけていたわたしに言っ
たものだ。「これはね、この店
からできているんだよ」と、言ひ
換えれば、わたしが、自分が聴いて
いる音楽のかから、この音楽は生
まれていた、というわけだ。

テキストになつていたのは、
ジャック・ブレヴェールの「春の大
舞踏会」(舞踏会)など、初期の作品
がジャンソンになつてはいたが、晩
年の話がこんなふうな「うた」にな
るのがとても驚きだった。リズ
ム、セクシオンのない、しかしシン
セサイザーを多用し、エレクトリッ
ク・ピアノが響く降るようにかがや
き、サックスやフルートが加わる。

経験から、美術館で行なわれるコ
ンサートをも提案、年末に数日間、
「ミュージック・イン・ミュージアム」
も開催された。いまでもよくおぼえ
ているのは、ジャン・リジョール・パ
ルビエが来日し、サティとセヴラッ
クの作品を弾いたり、山下洋輔がソ
ロで弾いたりという最初の年のコン
サートだ。

この店にいた人たちは個性豊かな人
たちだった。ここには音楽家、コー
ナーにかきつけられ、いまは関西にい
る若尾久美(音楽家、大山紀幸夫
(美術家/デザイナー)、岡田和枝(美
術家)といった人たちがいたし、日
本ではじめて環境音楽のレーベルを
立ちあげた直後、事故で亡くなって
しまった作曲家、河川聡もいた。河
川聡とともに、サウンド・プロセ
ス・デザインを立ちあげた田中宗隆
も、だ。

本について多くのことを書いてい
る永江朗も、その出身だった。彼ど
ちはもう少し経つてから話をするよ
うになったから、80年代の半ば前後と
いうことになるうか。最近で永江

記憶が定かではないが、コンサー
トにも行った。のちに上野耕路と話
して、あつたとき、あのステイヴのつ
ていたのは自分だ、と言われたこと
もある。上野耕路とは同じ船だから、
その早業に驚きもした。
そんなころから30年経つた。そし
て、LPは聴けなくなつてしまつた
ので、あらためてCDをフランスか
ら取り寄せた。かつてと同じように、
わたしはしばしば身震いをおぼえた。
ほかのアルバムに言及する余韻は
ない。ただ、この「Megumi Satsu
chane Prevert」一枚でいい。それが
が決定的なものだった。
合奏。

MEGUMI SATSU
Megumi Satsu chante Prévert
(CD)
http://www.megumisatsu.net/
e-shop.html

1 1 7

念願のLP携え帰国

薩めぐみ 来月、五年ぶりにリサイタル



パリに必要な歌手になった薩めぐみさん
＝北海道タイムズ社で

パリで高橋悠治のジャンソン歌
手、晩年の全曲をLPで出版し、
本名と同じ、高橋の自作LPを、本
場へ、高橋のリスナル準備
パリで高橋悠治のジャンソン歌
手、晩年の全曲をLPで出版し、
本名と同じ、高橋の自作LPを、本
場へ、高橋のリスナル準備

神も手立て、ラフワフと選
んだのが、高橋悠治のジャンソン
歌、晩年の全曲をLPで出版し、
本名と同じ、高橋の自作LPを、本
場へ、高橋のリスナル準備

「ユートピア」のジャンソン・ボ
ールとのレコーディングもすませ
た。七月十八日札幌市市民会館で
のリサイタルは、二人の作品を歌

パリ仕込み

シャンソンを歌う

22日に薩めぐみ

移り変わりの激しい歌の世界を相手にしていると、戸惑うことがよくある。「こんど京都でリサイタルを開く〇〇です」。『あ、そうですか』。あ、いそぐ受けたものの、失礼ながら内心は「こんな歌手がいたかな?」。

この人の場合も、そんなおぼつかない初対面だった。

薩めぐみ。二十二日午後七時から京都府立文化芸術会館で歌うシャンソン歌手である。かつて日本のシャンソン・コンクール(昭和四十三年、第五回)に優勝している...といっても記憶している人は少ないだろう。もっとも、この春まで五年間もシャンソンの本場パリで歌修業していたという



薩めぐみ

からのおさざりである。

「歌い手として仕事を続けて行くには一つのテーマを見つけたかったし、よそ見をせずに歌の勉強ができる場を思ってた...」。こんな夢を描いて、パリに渡ったのが五年前の秋。以来、往年の美声歌手ジャン・ルミエールについてレッスンを重ねながら、パリのクラフなどで実地の歌修業を続けてきた

そうだ。

今回はこの五年間の修業を問うリサイタルで、彼女によれば「パリで見つけたテーマでもある『三十年代の芸術的熱気』を歌う」という。一九三〇年代というのは、いうまでもなく詩人、文人、画家らが才能を競い合った時代。その当時の歌の中に自分の心情に合った作品を数多く見つけてきたそう。プログラムはプレヒト、コクトー、プレヴェールがほとんど。「私自身が古きよき時代のパリに住んだ一人の日本人といったふん囲気で」と意欲を燃やしており、ユニークなステージが期待できそう。

記者ポツポツ

「パリの地下室...」
「パリで最も古いキャバレー・シアター『ビエヌ・グーリ』で三週間にわたって開いたショーと同じものだと、一九三〇年代の古き風きパリを、そこに住む二人の女性として、表現して

トリを。

彼女が「デー・トリッヒ」の低音とピアノ・コロンボの激しさ



「フランス語をわからず、を表現する。プレ...それでは私はシャンソン歌手です...」
「フランス語の勉強に行ってきた...」
「フランス語をわからず、を表現する。プレ...それでは私はシャンソン歌手です...」

「フイガロ紙、三月四日」と絶賛された二人の日本人歌手が、このほど帰国、二十八、二十九の両日、渋谷の西武劇場でリサイタルを開く。

この歌手は薩めぐみ(写真)。加藤登紀子を生んだ、石井ミレーシタ・プロモーション主催のシャンソン・コンクールの第五回(四十四年)優勝者で、早大を卒業した四十五年秋パリへ渡り、四年半にわたり歌ってきた。日本でのショー

フランスの各紙が絶賛

「フイガロ紙をはじめ、フランスの各紙から絶賛されたのも、『日本人がフランス語で歌うのはビックリしないけど、難しいシャンソンをうまく表現する』という点で、喜んだ」
「フイガロ紙をはじめ、フランスの各紙から絶賛されたのも、『日本人がフランス語で歌うのはビックリしないけど、難しいシャンソンをうまく表現する』という点で、喜んだ」

「フイガロ紙をはじめ、フランスの各紙から絶賛されたのも、『日本人がフランス語で歌うのはビックリしないけど、難しいシャンソンをうまく表現する』という点で、喜んだ」
「フイガロ紙をはじめ、フランスの各紙から絶賛されたのも、『日本人がフランス語で歌うのはビックリしないけど、難しいシャンソンをうまく表現する』という点で、喜んだ」



「この服は珍しく欲しかったもの。知り合いのブティックの女主人が着ていたものをお願いしてゆずってもらったの。」



東京に帰ると一度は暖く「NUNO」のお気に入りのショールで。

ところが今回のコンサートに関する新聞記事のなかに、これをベースにしたジョークがあった。リベラシオン紙で、さきのジャン・ボードリヤールと薩さんの出会いを「ヘラジヤの発情期にグリーンランドの上空を飛んでいた飛行機の中で」と書いてあるのだ。思わずニヤリとしてしまう。

コンサートや新しいレコードを出すたびにそのファン層を広げてゆく薩さん。イタリア、ドイツ、イギリス、アメリカ、カナダの各国から公演の依頼がきている。

「でも目の回るような忙しさというのは私、

耐えられないんです。ひとつのコンサートをするとなると会場から見にゆかないと気が済みませへし」

今回の帰国で故郷の札幌と東京のディスコを下見した。次回の日本公演の準備である。

「ディスコでやりたいんです。レックスクラブは私のコンサートの成功によって若い人向き、という評判を塗り替えましたから」

「レックスクラブ」からは追加公演を依頼されたが断った。

「何故ですか？」

「初めの打ち合わせのとき、4日間では足りませんよ、といっておいたのに、いうことを聞いてくれなかったから、お断りしました」

完璧主義者ではない、最善を尽くすだけ。しかしその最善の中には会場の選択からテーブルの配置、照明や構成までもが含まれる。

聴衆をまるごと魔法にかけるような素晴らしいステージだ。たったの5秒でメグミの30年代の衣裳のポケットにすい込まれてしまふと、かつて絶賛されたステージはこうして出来あがるのだ。

一方薩さんの家にはテレビもラジオもない。自分でレコードは買わないし音楽も聴かない。欲しいと思うものがほとんどない。

「2年程前から、いつ死んでもいい、と思いつつながら暮らしているんです」

ロングサイズの煙草を絶え間なく喫いながらキョットとするような言葉をポツリと吐く。

「何故？」

「別に理由はありません。そう感じているだけ」

ステージで一曲一曲に全身全霊をかたむけて歌う薩さん。これから試してみたいことや新しいアイデアはたくさんある。ただし、運命からエンドマークが示されたときには何のためらいもなくそれを受け入れる心の準備が出来ている、ということらしい。

ある日突然 歌わなくなるかもしれない、 そんな予感がするのです。

薩めぐみ

シャンソン歌手

86年1月15日からの4日間、パリ2区にある「レックスクラブ」にはいつもと違った種類の客が統々とつめかけた。

普段はディスコとロックのライブハウスとして有名な「レックスクラブ」だが、その夜は立ち見席ではない。フロアにはテーブルと椅子、灰皿が置かれ、そのせいでキャパシティは半分になっている。

午後9時、ほの暗い場内、待ちこがれていた声がどこからか聞こえてくる。深みのある低音からのびやかな高音まで、音域の広いオペラタッチの曲だ。

眉を剃った独特のメイク、黒のワンピースに鮮やかなブルーの上着、シルクのアンサンブルに身を包んだ彼女は会場の最後部から現れた。その姿に観客の目は釘付けになる。

一曲目の「Lifting Zodiacal」(運命転換ク

リニック)は、消費社会の神話と構造などの著書で有名な社会学者ジャン・ボードリヤールが彼女の今夜のステージのために書き下した詩だ。作曲はビエール・ポルト。

自分の運命が気に入らない人のため「運命転換クリニック」があり、幸せな運命を望む人はそこへ行く。と始まり最後は、なにしろ悲劇的なのはこれで幸せになってしまう運命になってしまったこと、という内容。メグミ・サツお得意のブラック・ユーモアの世界だ。薩めぐみさんは1970年からパリに住み始め、日本よりも本場フランスで有名なシャンソン歌手だ。

彼女の声には強い磁力がある。ステージはもとよりレコード、テレビ、ラジオでその声を耳にした人々を必ずとりこにしよう。テレビから流れてくる彼女の「枯葉」に魅

せられて、未発表の作品を彼女のためにと追った詩人ジャック・ブレヴェールは他ならぬ「枯葉」の作者だった。彼女の一枚目のLP「ブレヴェール/メグミ・サツ」はこれがキッカケで生れた。

漫画におけるブラック・ユーモアの旗手であり作家としても短篇、戯曲、シナリオと多芸のローラン・トポールに初めてシャンソンの詩を書かせたのも歌手メグミ・サツの魅力をもったことだった。

「プロの作詞家ではなく文学者の詩に曲を付けるという手法は30年代ではあたりまえのことだったんです。私は現代でそれをしているだけです」

話す声は低音。響きの良い美しい声だ。フランスで廃れようとしていたシャンソン・リテレル(文学シャンソン)を甦らせ

ご自慢のヘアスタイル。デザイナーはもちろん薩さん自身。



ランス・シャンソンの新しい擁護者」とまでいわれた薩さんのレパートリーはトポールが加わることにより新しい「ブラック・ユーモア・シャンソン」という分野を開拓した。余談になるがフランスに於て薩さんとトポールの出会いは「アムステルダム動物園でオカビの葬式に同席したとき」というのが通説だ。しかしこれは「事実自体はバブリックに対してなんの面白味もない」とするトポールの持論をうけた薩さんのジョーク。

電話帳をも歌いこなすだろう

シャンソンにも、大衆小説と「純文学」があるとすれば、明快に愛をうたい上げる「枯葉」や「雪が降る」などは、さしずめ大衆小説だろう。

薩めぐみのシャンソンは、それとはちよと違う。眼の青いペンキ塗りの黒い馬たちとか、むごいもの、錫張りカウンターで茹玉子を割る小さなあの音……といったジャック・プレールの詩であり、そしてまた「セックス・ショッブ」や「若い娘のバラバラ肢体」の「ビルの地獄の東京」ママに愛され、近親相姦不倫の愛、などがズバズバと出てくるローラン・トポールの詩を歌っている。こういったシュールレアリス

ティックな詩をのせるメロディは、ロックである。しかし、詩を邪魔せず、また曲もすぐ古臭くならないようにと、レトロ(復古)調の一九三〇年代のイメージにまとめ上げられている。いつてみればハイブローなシャンソンで、労働者向けではなく、インテリ好みなのである。彼女は、このシャンソンを今年の二月から五月にかけて、パリのコンサートで発表した。それを七月の十三日から十六日にかけて、東京・渋谷の西武劇場でそのままフランス語で歌ったのである。

とてもいいし、泣く、喜ぶ、金がない、失恋した……という深い人間の気持ちを感じさせるシャンソンはたっぷりと伝えます。エディット・ピアフはもっと大衆派だったけれど、でも気持ちは同じですね。黒い服で、舞台であまり動かないし、淡く派手、なところも似ています」と、激賞している。

シャンソン向きの声といわれて

薩めぐみは、結婚前の名前で本名である。札幌出身で早大商学部の学生の時、フランス人ピアノストから「あなたの声はシャンソン向き」といわれ、そこではじめて歌の練習をはじめて昭和四十五年の第五回シャンソン・コンクールに優勝してしまった。会社や役所に就職する気はなく、できればファッション・デザイナーになりたい、と思っていたところで、石井好子さんの事務所に入り、銀バリーやラジオなどで毎日歌っていた。そのころは日本語で歌った。しかし、歌うのに追われるような気がしてきて、卒業した秋にパリへ渡った。モダンダンスや歌の勉強を少しして、一年後には石井事務所のツテで「シェ・マ・クジューヌ」「トゥール・エッフェル」といったキャバレーで歌いはじめた。もちろん、大衆派「シャンソン」である。年

配の歌手を見ていて、いつまでもこうやっていても仕方ない、と三年でやめて、リサイタル形式に切りかえた。

それが七五年のキャフェ・テアトル・ヴィエイユ・グリーユにおいてアレヒトヤコクトー、プレールなどの一九三〇年代の詩を歌った第一回で、ここから「純文学」がはじまっている。その年にやはり東京・西武劇場で公演した。

七八年にはキャフェ・テアトルの「セレニッツ」で三カ月のリサイタルをおこないアラン・ルブロンらの詩も加えた。そして今年である。二年に一回くらいのペースだから、日本では所属するプロダクションもレコード会社もない。ゆっくりと自分の調子でいくためにである。レコード「ジャック・プレール／薩めぐみ」(リリオン社)もフランス製のみである。九月には二枚目のLP「ローラン・トポール／薩めぐみ」が出る。

J・プレールにほれこまれる

西武劇場でのリサイタルは、前半がプレールを十曲、後半がトポールを十曲だった。

ジャック・プレールは「枯葉」の詩を書いた詩人として知られるが、生前テレビやラジオに出る度に自分の詩を歌ってほしい、といっていた。死んでからそれを知った薩は、未発表の詩を読み、その中からプレールの知られざる側面が出るようにと選んだ。未亡人が「夫がこの



1930年代風の産物で30年代風のインテリアにつつまれた生活 東京・世田谷の自宅で

詩を歌ってもらいたがっていた」というものでも、落としたものがある。作曲もむずかかった。曲が付けにくく、作曲家を変えたりして何度もやり直している。ローラン・トポールは一九三七年生まれのブラック・ユーモア作家で「幻の下宿人」などで知られるが、意気投合してやはり彼女のために詩を書いた。

パリのリサイタルは、二十もの新聞雑誌に評がのり、ほとんどがほめる記事だった。「エル」誌は「フランス・シャンソン界の新しい擁護者」、「ル・モンド」紙は「肉食性の花のように、エキゾチックで、超現実的に我々を魅了する」といい、「パリ・エポック」誌は、かつてコクトーがピアフを称賛した言葉を借りて「めぐみは電話帳をも歌いこなすだろう」と書いている。この中で「日本人が」といっているのは少ない。

舞台では、まっ黒なドレスの薩がうたう。ドレスは古着屋でみつけたもので、一九三〇年代に活躍したオートクチュールの大御所リュシアン・ルロンのデザインしたもの。バックのスクリーンには、パリの写真が映る。

しかし、なぜ三〇年代なのだろうか。パリだって若者はロックやポピュラー音楽ばかりで、薩のシャンソンも「傍流」だ。だが、きっかけは三〇年代に歌っていたマリアンヌ・オズワルドのレコードを手に入れたことにある。そこにすべてが見えたのだらう。歌も生活もファッションも、機能の中に美を見つめた三〇年代の新しいで、現代をもう一度さらってみよう、としているのだ。

本 誌・田島正夫
出版写真部・内田洋司



フランス人の聴衆も多かった パーティーでは紙のコップで乾杯

プレヒト、ナ
レヴェールを中
心に、フョール
ブリウィエ、
デスロス、H・
J・クルーゾー
らの詩にある文
学的ジャンソン
を、フランス語
で歌った。文学
通りのワン・マ



薩歸
めぐみの国

七年前の第五回シャンソン・コシクルで優勝後、单身パリに渡ってクラブなどで歌いながらシャンソン修業していた薩めぐみ(三)が五年ぶりに帰国、二十八日午後コクトー、プレバールの作品を集



薩めぐみ

七時と二十九日午後五時から渋谷
・西武劇場でリサイタルを開く。
帰国直前、パリの古いキャフェ・テ
アトル「ビエユ・グリユ」で
三週間にわたって開いてきたシヨ
ーと同じ内容で、パリの三〇年代
ノ伴奏者」と組んで、好きなもの
を歌っていきたい。パリではいく
つかのキャフェ・テアトルから年
内の出演依頼を受けています。い
ずれにしても、三〇年代の芸術的
熱気を追っていくことになりそう
です。

☆薩めぐみ☆ シャンソン・コ
ンクール（六八年）に優勝し、パリ
でのどをみがいていたが、このほ
ど五年ぶりに帰国。東京・渋谷の西
武劇場でのリサイタル（二十八、
二十九の両日）を皮切りに、演奏
活動を開始する。

そのリサイタルでは「シャンソンのなかのシャンソン」といわれる一九三〇年代の名曲を歌うが、これは帰国寸前、パリで最も古いキャフェ・テアトル「ヴィユ・グリイユ」で、三週間続演して、フランス人以上のシャンソンと折紙をつけられたステージをそのまま再現する。

三〇年代の歌には三〇年代のドレスで、とこの夜の衣装は、パリの古着屋で五年間探しつづけて見つけたココ・シャネル製作のドレスを着用に及ぶ。

笛はアウロス

平和だが、戦雲がかくくろ渦を巻いて、い時代だ。そして時代精神は最も端的に現わしているのがプリティワイルの「三文オベラ」からのマッキィ哀歌、海賊の花嫁、バルバラの歌、大砲の歌、快活な生活の唄などである。これらの音楽は、いさぎよいもにれ、官能を燃え立たす。「ハッピー・エンド」よりのメロバヤ・ジョーやビルボウ、ソングもそうである。そこには傑出したもの悲しさはない。プリティワイルの音楽によって、

「コスマの『こども狩り』」「枯菜」にしても、夫人のニギハヤヒ（藤田桐治の夫人であった）に導かれテオスノス（『最後の詩』）に、どうしてこの世の心は貪んでこんでる歌ばかりなのか、ブレヴェールの『タクシー運転士の悪い夢』や『朝寝坊』などの痛烈な皮肉、湿潤、コクトーのモンテパルロの小説が映画の断片のよちな人生縮図を、確めぐみほほくろ気なく、しかも味わい豊かに感じ詰った、近來にならぬ、書かぬある、知的で手ごたえのある、ヤンソンのタペであった。（八月20日・西武劇場）

中身の濃い表現力
薩めぐみ シャンソン
リサイタル
30年代のパリに生きた、コク
ト、プレヴェール、そしてプレ

薩 めぐみ

（西武劇場「シャンソン・リサイタル」28日夜7時・28日夕5時）

〇…シャンソンを愛する歌われ
る（この歌は）1930



ンに出会ったとき「これこそ私のうたう歌と聞いた」という。その彼女の歌い手としてのテーマを初めて明確にしたのは、留学四年目、昨年の夏、南仏パンヌ文化センターでのリサイタルだった。帰国前の二月から三月にかけてはカルチエタンのカフル、そして先日、東京で作品展が開かれたジャン・コクトーのシャンソン。パリ留学中に出会ったピアニストのクロード・ローラン私蔵の楽譜から、彼女が一つ一つ自分のレパートリーに加えていったものだ。



〇…薩めぐみは、早稲田大学在学中の四十三年のシャンソンコンクールに優勝。四十五年パ

リに渡った。30年代のシャンソンに出会ったとき「これこそ私のうたう歌と聞いた」という。その彼女の歌い手としてのテーマを初めて明確にしたのは、留学四年目、昨年の夏、南仏パンヌ文化センターでのリサイタルだった。帰国前の二月から三月にかけてはカルチエタンのカフル、そして先日、東京で作品展が開かれたジャン・コクトーのシャンソン。パリ留学中に出会ったピアニストのクロード・ローラン私蔵の楽譜から、彼女が一つ一つ自分のレパートリーに加えていったものだ。

〇…薩めぐみは、早稲田大学在学中の四十三年のシャンソンコンクールに優勝。四十五年パ

「日本とパリと両方で歌いたい」と語る薩めぐみ、パリでのシャンソン修業を終えて5年ぶりの帰国

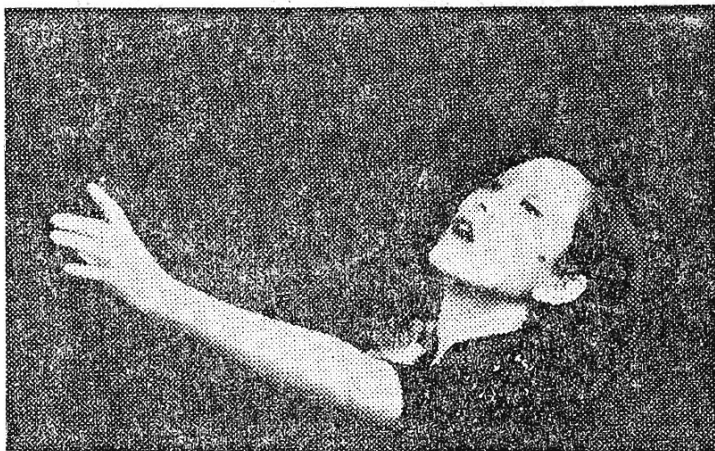
3月初め、パリのもの憂げでしや 本の両方でステージができたろう
れたムードを漂わせた女性が、5年 れしい」と抱負を語ってくれた。

ぶりに帰国した。その人、薩めぐみは68年の第5回シャンソンコンクールに優勝した人。70年にパリへ渡りフランス語を学びながらシャンソンを勉強してきたのです。パリの伝統あるクラブなどで歌っていた彼女は「これからパリと日



パリ帰りの薩めぐみ

22日 京都でリサイタル



パリから五年ぶりに帰国した一やクラブなどで歌い、ことしシャンソン歌手・薩めぐみが、二月から三月にかけて三週間、二十一日午後七時から京都府立文化芸術会館で帰国リサイタルを開く。

彼女が東京生まれ、早大商学部卒。四十二年度の「国内シャンソン・コンクール」で優勝し、四十五年十月、単身渡仏。ミレーユ・マチューの先生でもあるジャン・ルミエールに師事。そのかたわらレストラン・シアタ

入場料二〇〇〇円。

ボートリヤールが作詩してくれた

新しいLP『則天去私』を聞いて、めぐみの歌い方や歌の世界が軽くなった印象をまず受けました。

「楽器を減らしたんです。前はいろんな楽器を取り入れてましたけど、私はステージにミュージシャンを数多く並べるのはあまり好きじゃない。だったらレコードを聞いた感じとステージで聞く音があまりかけ離れてはいけないと思って、よりシンプルに……」

今度のLPではフランス人の作曲家ばかりの中に日本人の細野晴臣が一人編曲で入っていますね。

「パリのレコード会社の人が、日本のミュージシャンはヨーロッパの市場を知らない、って言ったわけ……そう言われたらせめて一曲くらい日本人で……（笑）。細野さんと一緒に仕事してみたら、やり方は同じですね、むしろの人達と。そういう意味で、これから日本人のミュージシャンとの仕事が増えるかもしれない……」

このLPの特徴は、初めてめぐみさんが詩を書いたこと。『私も人の子 みんなと同じ 死体の肉を食べない時は 朝食べるのはクロワッサン 顔死の記事を眺みながら』……それもフランス語で。

「（笑）本当は自分で書くなんて夢にも思っていなかった。ある人に詩をお願いしたんですけれど、まわりの人は、どうもこの詩はあなたの口から出てきて歌われるには似合わない、という意見だったわけ。どうすればいいかと迷って、詩を少しずつ直し始めたわけです。どんどん直して、うちに全く違うものになってしまった。結局、自分で四つの詩を書いた」

人間プリズム

いまをときめくジャン・ボードリヤールに詩を頼むとは意外です。『ジャン・ボードリヤールが詩を書いた』

たというときみんながビックリする。まさか社会学者が詩を書くなんて//って。彼の本を何冊か読んで、彼の物の見方になんか前から影響されているんです。だから、彼に頼めばきつと面白いものができると思って……書いて欲しいと思う人は、そうなかなかいないでしょう。

それに、彼とはぜひ知り合いになりたいと思つたの……こんなに今の時代が分かっている人だから……私が一番感動した彼の本は『消費社会の神話と構造』……」

私は東京の方がいいんですけど、めぐみはパリの方がいい。

「何となくそうなっているの。日本だけで活動していくよりは、日本というベースもあり、フランスというベースもある、二国間、を核にしてやっていきたいの」

聞き手&撮影★コリーヌ・フレ
（仏）「リベラシオン」紙東京特派員



■薩 めぐみ

さつ めぐみ♥昭和23年2月14日生まれ、36歳。札幌市出身。昭和43年、早大商学部3年の時、第5回日本シャンソン・コンクールで優勝。早大卒業後、渡仏。シャンソン歌手。

帰国した歌手 薩 めぐみ



古き良き歌に光りを！

古いがゆえに、人々の口にのぼらない歌がある。1930年代の、そんなシャンソンを掘り起こして、雑然とした時代の隠れた生活感情を、独特な抒情で唱いあげるのに成功した一人のシャンソン歌手が、このほどパリから5年ぶりで帰国した。薩めぐみ、68年の第5回シャンソン・コンクールに優勝後、70年単身パリに渡り、モンマルトルの「シエ・マ・クジヌ」をはじめ数多くのクラブでの舞台活動を通じて、フランスの各紙から絶賛された。先月28、29日には、渋谷の西武劇場で「30年代のパリに生きたコクトー、プレヴェール、そしてブレヒトに捧ぐ」と題した初のリサイタルを開いた。

ところで彼女が早大商学部に在学中、たまたま同じシャンソン研究会に籍を置いていたのが、「神田川」で若者の心を深くとらえた作詞家の喜多條忠さん。渋谷パルコのレストラン「Casa Bianca」の舞台に立つ薩さんと5年ぶりに再会した。二人に、当時の思い出やパリの生活、歌の心などについて幅広く語り合ってもらった。

ピンクの衣装

喜「僕は薩さんのことを強烈に覚えています。

初めて紹介された時、ああこれがプロの歌手なんだなと思って胸がふるえました」

薩「あの頃の自分を思うと恥ずかしいわ」

喜「ステージ衣装みたいな、そう、明るいピンク色の服を着ていましたね。季節はちょうど今頃……」

薩「ピンク色の服なんかもっていませんよ。

私は黒が好きだから」

喜「あの当時から『銀巴里』で歌っていたのですか？」

薩「ええ」

喜「僕はおっばら浅川マキを聴きに通いました。薩さんの歌はあまり記憶にありませんね。やっぱりピンクの洋服しか……」

薩「私にとっては嬉しくないけど、当然だと思います。日本では本当に自分の歌と思う歌をやらなくて、ただシャンソンと称するものを歌ってきただけだから」

パリの風俗

喜「僕はシャンソンというよりフランス、特にパリに心がひかれるんです。パリに行って感じたのですが、パリジェンヌって、意外に質素ですね」

薩「フランス人も、日本人はどうしてあんな

「神田川」の作詞家 喜多條 忠

に流行ばかり追うのかって言ってますよ」
喜「あまりいいものを着ていないでしょう」
薩「そんなことないわ。お金がなくても、そのあたりの店で安くて質のいいものを買う人も多いですよ」
喜「サン・ミシエルの穴ぐらなんかでは、買い物かごをさげたおばさん連中がいっしょに合唱している」
薩「歌を楽しもうとする意識が強いです。日本人はどうしても構えてしまいますね。でもそれだけが歌ではないと思います。30年代の詩人や映画監督のクルーズの詩にメロディをつけた歌なんか、耳慣れた判りやすいものではありませんからね」

歌の客観性

喜「シャンソンにはストーリーがある、とくにプレヴェールなんかは。日本の歌謡曲は断片的な歌が多かった。最近では語りものの要素を取り入れた歌もでてきましたが」
薩「日本の歌には客観性がありませんね」
喜「プレヴェールの詩には事実だけを淡々と述べたものがある。例えば『朝の食事』……」
薩「『朝寝呆』にしても……」
喜「客観性というのは、ハイブローなものに通じるから商業的に嫌われやすい」
薩「フランスでも同じです。でもそういう職人的なすばらしさをもった人たちが作った、優れた歌もなくはだめだと思うわ」

ジターの臭い

喜「パリの街は好きですか」
薩「好きです。でもシャンゼリゼは嫌いですね。シャンゼリゼで生きている人っていうのが少ないですから」
喜「パリのにおいというのはありますね」
薩「パリのにおいはなくても、個人個人のにおいがあります」
喜「ゴロワーズとかジターンといった煙草の強烈な臭い……。パリでお金をすられてジョンボリー一人でビールを飲み、酒場に行ったら、この臭いがたちこめているんです。忘れられないなあ」
薩「日本でいえばゴールデンバットですね」
喜「かまやつひろしが好きで『君はゴロワーズを吸ったことがあるかい』って歌を出していますよ」
薩「それはぜひ聴いてみたいわ」
喜「住むならやっぱりパリ。パリの屋根裏部屋でくたばりたいもんですね」



グラスを傾けながら薩さんの歌を聴く 喜多條さん(左)



学友再会……渋谷の街角で

薩



声にドラマを持つ女 “パリのヒロイン” と呼ばれる個性

今、フランスのシャンソン界で、注目されている1人の日本女性がいる。薩めぐみがその人だ。
ル・モンド紙、エル誌、リベラシオン紙……など新聞や雑誌は、こぞ彼女に賛辞を贈った。フランス・シャンソンの新しい擁護者、マイベットのギルベールの再来、などと。
1970年、22歳でパリに渡り、以来10年間、多くの歌との出会いを重ねながら、彼女は、自分の歌の世界を築き上げてきた。そして今、彼女は『枯葉』の詩人ジャック・プレヴェールの詩を歌い、画家でもあり作家でもあるローラン・トボールの詩を歌う。その声

め

「ジャック・プレヴェール、2枚のアルバム『ローラン・トボール』が発売した薩めぐみ。彼女を知る人は、まだそう多くはないかもしれない。彼女はブルトンやジャン・コクトーなどの文学的要素の高い詩を歌ってきた。カフェ・テアトルと呼ばれる小劇場で、商業的な成功とは無縁に、歌い続けてきた。フランスで高く評価されたとは言え、その意味で、彼女はポピュラーな歌い手ではないと言っている。フランスの多くの歌手たちが、伝統的なシャンソンを離れ、ポップスへと移行する中で、彼女はホンモノのシャンソンを求めて歌ってきた。クラシックにもビートルズにも、音楽には無関心だった彼女が歌い始めたのは、20歳の時だった。作曲家でもピアノでもあるエミール・ステルン氏との偶然の出会いが歌の世界へと彼女を引き込んだ。『あなたはともいいう声をしているから、ぜひ歌いなさい』



そのひととて歌い始めて、その年68年のシャンソン・コンクールに優勝。『日本のシャンソンは宝塚からの流れ』という彼女は、大学を卒業した年、フランスへと渡った。歌の世界も知らず、フランス語の会話もおぼつかないままの旅立ちだった。
「どうせ歌うなら、本場で考えたの。それに、やさしいことから始めると、あとが辛くなってくるでしょ。だからむずかしいことをやろうと……」
無謀とも思える行動を彼女は起こした。まずフランス語、パントマイム、モダン・ダンス……歌うために必要と思われる学校に通った。
いくつもの運命的な出会いも重なって、着実に彼女は自分の思った道を歩

く

「日歌って、それだけいけば、お大変です。金が入ってくる。ただ、ね。毎、どうはしたくないんです。自分が本当にこれをやりたいと思った時だけやるのはシンドイわね」
75年に初めて3週間のリサイタルを



開催。77、78年3カ月間のリサイタル。そして、今年の初め、プレヴェールとトボールを歌った2つのリサイタル。1回ごとに違ったレパートリーとステージ構成をしてきた。
「売れて当然って歌は、誰にでも歌える。だけど、いかにも売れなさそうなのを歌うのは、モノ好きじゃなきゃ

み

「きかないと思ふ」
「私はその一人なのよ」と言いきる彼女の言葉に、自分の歌への自信が感じられる。
眉をそり落とし、ステイジでも普段でも、黒を身にまとう。そのほとんどは古着。ある不思議なムードが、彼女を包み込んでいる。現実感のないイメージの空間に彼女はいるように見える。それは彼女の歌にも通しているようだ。深みのある低い声、その声自体が、何よりも彼女を語っているとも思える。フランス語で歌われる彼女の歌は、言葉の理解を超えて、心に残る。
ノスタルジックなその響きは、時間と空間のない世界へと聞く者を導き入



「日本人だつてことがマイナスになっているとは思わない。だからといって好意的に評価されたとていい……」と。
そして今回の、彼女への評価を冷静にこう分析した。

「私に向いているものと違うものがあるでしょ。違うものは歌いたくないの。確かに時間はかかるけど、それが一番早いんじゃないかと思う」
自分がこうしようと決めたものを実現するための最善の努力は惜しまない。
「絶対に道は開けてくるはずだもの」
「でも、自分の周りに、理解者は必要ね。今、私には、私のいい面も悪い面も理解してくれている主人がいる。彼がいなかったら、私は今みたいじゃなかったかもしれない。何かを始める時、精神的、経済的な自立も大切だけど、何らかの形で勇気を与えてくれる人は必要じゃないかと思う」
そして今回の、彼女への評価を冷静にこう分析した。

薩めぐみ 故郷・札幌でリサイタル

札幌出身で、フランスで活躍中のシャンソン歌手・薩めぐみ（めぐみが十八日、五年ぶりに札幌でリサイタルを開く。プレレール、プレレール、コクトーらの前衛的あるいは超現実的な詩をひたすら歌い続ける薩は、沈滞気味のフランス・シャンソン界にあつて「シャンソンの新しい擁護者」と絶賛されている独自の世界を持った注目歌い手。つい最近、生前のプレレールが彼女に歌われることを切望し

前衛的な詩歌い続けて

にいち早く取り組んでいるあたりが、ポピュラーに流れがちな近年のシャンソン界にあつては衝撃的につづいたものだ。薩によれば、最近のシャンソンの状況は「音楽の世界的な傾向だがシンガー・ソングライターの登場で質を無視し続けて十年以上になる」と厳しい。本来は相当な才能を必要とするシンガー・ソングライターなのに音楽産業側が安易にちっぽけな才能を登用してきた結果、という訳

る。一部では、映画「天井桟敷の人々」のシナリオやシャンソン「枯葉」で知られるジャック・プレレール（一九〇〇—一九七七）が、薩のために遺作のLPにもなった詩による作品。二部はブラック・ユーモアの世界で多才ぶりを発揮している作家ローラン・トポールが、やはり彼女ののために書いた詩による作品を歌う。

「『枯葉』に代表されるプレレールのポピュラーな側面は、イブ・モンタンによってすでに完成されているから私には興味はない。私は確かに難解なものを選んでいくかも知れないけれど、よりよき聴かせようとする努力すればそれは大衆にも聴いてもらえる作品となるし、本当は大衆が好きな世界だと思つています」。

その、大衆も本当は好きなのものを、企業のプロモーションの論理が妨げがちなからというわけで、今度発売されたLPも、輸入盤で彼女の音楽を本当の理解してくれるレコード店（現在全国で十店）にだけ置くという風変わりな方式をとっている。販売のためのプロモーションも、独力で積極的なマスコミに登場する「手作り派」だ。

とにかくなかなかのバイタリティーだが、私が開拓者精神の札幌育ちのせいかもしれない。私の場合は文化を開拓するということで「すけれど」。確かにめぐみは、本場フランスでも未開拓の新ジャンルに、そのフロンティア・スピリットで挑んでいると言えるかも知れない。



1930年代を思わせる個性的なメークで語る薩

本場・フランスでも絶賛

だ。

逆の薩の場合は、詩、曲、歌

い手という分野による総合芸術

という本場のシャンソンの在り

方に徹底してこだわり、それぞ

れを納得するまで吟味しぬくあ

たりが、かえって異端に見られ

る理由ようだ。

薩は二十三年の生まれで、高校を卒業するまで札幌育ち。早稲田大学の三年在学中にシャンソンコンクールで「愛の命」を歌って優勝。その数カ月前に、フランス人のピアニストに声がかかり、シャンソン向きと言われて石井好子のもとで習い始めたばかりだった。

一九七〇年に渡仏。数多くのカフェ・テアトルに出演、七五年には三週間のリサイタルで絶賛された。テレビの詩による文学的なシャンソンの世界

今回のリサイタルは、一部十曲、二部十一曲による構成。一部はマルチスクリンも使った新しい新ステージ。二部は薩本人の室内を再現した舞台にな

あたりにもうかがえる。

「めぐみ シャンソン・リサイタル」は18日午後7・0から札幌市民会館で。入場券はA席三千円、B席二千円。電話予約は札幌（041）118-1181、TV事業課へ。

また、LP「めぐみ ジャック・プレレールを歌う」は道内は札幌バルコ内、銀座山野楽器で発売中。

今回のリサイタルは、フランス文化省の外部団体「メゾン・デ・キュルチュール・デュ・モンド」などの強い働きかけで突然実現した。新進演出家のA・ホコアン氏がとくに演出を買って出たほか、多くの伴奏家、舞台関係者が協力し、パリの由緒あるカフェ・テアトル（劇場喫茶）の「バタクラン」を舞台に選んだ。

曲目は全部で15。いずれもジャック・プレレール（「枯葉」の作者）などフランスの現代詩人、文学者のほか薩さん自身が作詞した曲で、大半が前回のリサイタル以降の新曲。薩さんが得意としてきた「文学的、哲学的シャンソン」（仏語に加え、コミカルな曲や

たという未発表の詩作品から十編を選んだLPも出たばかりだ。

もろうために彼女を探したが果

たせぬまま死んだというエピソードは有名。薩は「プレレールは私が昔から片思いしていた詩人。彼の遺作を歌うのは確かに偶然かも知れないですが、その偶然を招くだけの私なりの努力はしてきたつもり」。

そうした自信と信念は、プレレールの膨大な遺作の中から、シニール・レアリステックな内容の詩ばかり十編を選んでいる

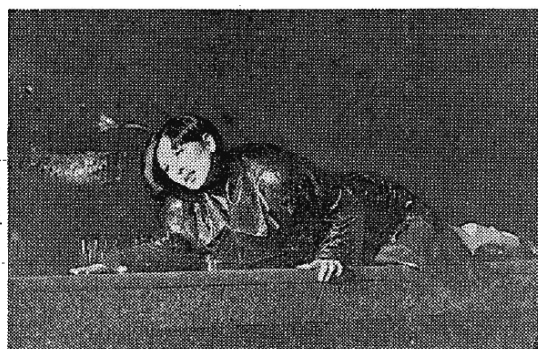
「めぐみ シャンソン・リサイタル」は18日午後7・0から札幌市民会館で。入場券はA席三千円、B席二千円。電話予約は札幌（041）118-1181、TV事業課へ。

また、LP「めぐみ ジャック・プレレールを歌う」は道内は札幌バルコ内、銀座山野楽器で発売中。

今回のリサイタルは、フランス文化省の外部団体「メゾン・デ・キュルチュール・デュ・モンド」などの強い働きかけで突然実現した。新進演出家のA・ホコアン氏がとくに演出を買って出たほか、多くの伴奏家、舞台関係者が協力し、パリの由緒あるカフェ・テアトル（劇場喫茶）の「バタクラン」を舞台に選んだ。

曲目は全部で15。いずれもジャック・プレレール（「枯葉」の作者）などフランスの現代詩人、文学者のほか薩さん自身が作詞した曲で、大半が前回のリサイタル以降の新曲。薩さんが得意としてきた「文学的、哲学的シャンソン」（仏語に加え、コミカルな曲や

新曲を意表つく演出で



バーのカウンターで熱唱する薩さん

日本ムードを加味した曲もいくつか含まれ、これまで以上に芸域の広さを見せている。全曲をシンセサイザーの伴奏で歌っているのも新しい点だ。

観客を特に驚かせたのが、演出。黒一色の衣装はいつも通りだが、とりわけ初めの3曲は、客席後方にあるバーのカウンターに横になって歌うという思い切った手法を取り入れ、曲の持つけだるい雰囲気やいやが上にも

盛りあげている。

薩さんは「いつも同じではつまらないので、新しいことをやってみました。演出から舞台、衣装まで気の合った人たちに担当していただき、本当にうれしい」と晴れやかな表情。今回の公演は、12月6日までを予定しているが、関係者の都合がつけば、年末までのロングランを考えているという。

薩さんは来年春以降、

東京、札幌でもリサイタルを開く予定。

（パリ・浜地特派員）

薩めぐみ
リサイタル

パリで

道産子活躍

歓喜のように うそぶくように 嘆くように
そして憂えるように 薩めぐみは歌う 東京渋谷・西武劇場で この衣装は1930年代のスタイルから 札幌の三浦ジュン子氏がデザイン

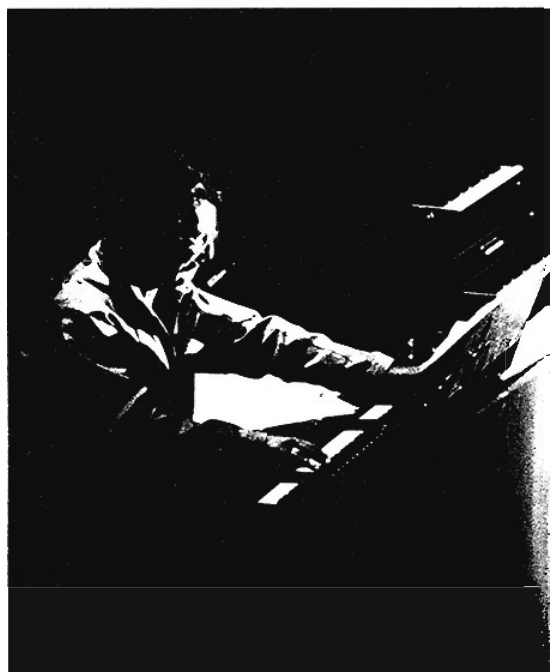


パリで人気の、純文学派・シャンソン歌手の
薩めぐみが、七月中旬に東京と故郷の札幌で、
五年ぶりの帰国リサイタルを開いた。一九三
〇年代のパリを感じさせる彼女の舞台は、人
間がもっと心豊かに生きていた時代の空気を、
みごとに持っていた。

いんぷるも 嘆き 憂いもいん

パリで人気のシャンソン歌手薩めぐみ帰国リサイタル





ミュージシャンはバリからやってきた ジャン
＝ビエール・ドルセ(左)とフェルナン・ブードゥ

り益子将醤油の

タマリ漬

味の最後のよりどころ

下野しも野の沃野よくやでとれた新鮮な
野の幸・山の幸を
三年もの歳月をかけた
濃厚な天然のタマリ醤油に
どっふりと漬けこみ、
芯の芯まで味のしみ渡る
のを根気よく待って仕上げた
手造りの漬物です。



益子将醤油醸造元漬物部

り益子将醤油(株)

栃木県栃木市箱根町七十六
電話(0286)221-0034(代)

宇都宮 ● 桜大谷通り店(0286)361-1895
馬場通り店(0286)351-7732
大宮 ● 駅前中央通り店(0486)441-0575
■ 地方発送も承っておりますので是非ご利用ください。



トボールの超現実世界を激しく
歌う 公演ステージの鏡の前に



客席に下りて語りかける
ように トボールを歌う

第二の越路吹雪と、いま評判

日本で無名、花のパリじや有名人 輸入人間・薩めぐみに注目しよう

音楽界はいまや、逆輸入の時代に突入。つまり、まず海外でウケてから、やっと日本で人気が出るという仕組みが大はやりなのだ。
大人気のY・M・Oしかり、プラス



洋服も「白と黒しか持ってませんわ」

チックスしかり。シンセイザイザの巨匠・富田勲も同じパターンだった。そんな日本の音楽シーンに新たに加わったのが、この人、薩めぐみ。シャンソン歌手だ。

7月13日、16日の西武劇場のコンサートのため、帰国というか「来日中」なのだ。レコードもフランスで発売、日本では、4月の末に輸入盤として売り出された。

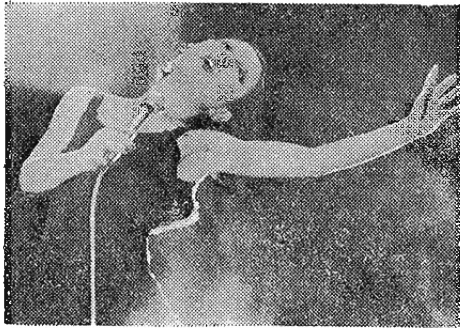
ざっと紹介しておこう。札幌生まれの32才、早大商学部卒。20才のとき、突然のように「シャンソンをうたいだし、その年のコンクールでみごと優勝。石井好子に師事する。大学を卒業後はここ10年間というもののパリに住んでいる。既婚。

「パリに行く前は、シャンソンにこだわっていたけど、向こうでマリアンヌ・オズワルドの歌に出合った(レコードで)ことで、自分のやりたいものがつかめました。当分は行ったり来たりでしょう。日本の歌からも何かをみつきたい」という。

ざっと紹介しておこう。札幌生まれの32才、早大商学部卒。20才のとき、突然のように「シャンソンをうたいだし、その年のコンクールでみごと優勝。石井好子に師事する。大学を卒業後はここ10年間というもののパリに住んでいる。既婚。

「パリに行く前は、シャンソンにこだわっていたけど、向こうでマリアンヌ・オズワルドの歌に出合った(レコードで)ことで、自分のやりたいものがつかめました。当分は行ったり来たりでしょう。日本の歌からも何かをみつきたい」という。

ざっと紹介しておこう。札幌生まれの32才、早大商学部卒。20才のとき、突然のように「シャンソンをうたいだし、その年のコンクールでみごと優勝。石井好子に師事する。大学を卒業後はここ10年間というもののパリに住んでいる。既婚。



これぞシャンソールの舞台風景。

原宿情報、ただいま

原宿情報、ただいま「バツジ族」が増えています

原宿情報、ただいま「バツジ族」が増えています

原宿情報、ただいま「バツジ族」が増えています

薩めぐみが

リサイタル

五年ぶりに仏から帰国

このほど五年ぶりに帰国した薩めぐみ(写真)が二十八、九



の両日、東京・渋谷の西武劇場でシャンソン・リサイタルを開く。

プログラムは、一九三〇年代のパリに生きたフレイト、コクトー、プレヴェールに捧げるもので「スラバヤ・ジョニー」「メイドのアンナ」「ひとりのぼつち」ほか。これは帰国直前、パリのキャフェ・テアトル「ビエイユ・グリュウ」で三週間にわたって開いたショーそのま。ピアノ伴奏(クロード・ローラン)だけの地味なスタイル。

ある。「枯葉」の作詞で世界的に高名な現代詩人、プレヴェールとの出会いだ。彼が病床で、テレビでうたいながら彼女の歌を聴き、ぜひ、彼女にばくの詩をうたってほしい」と遺言したまま亡くなった。

「パリに行く前は、シャンソンにこだわっていたけど、向こうでマリアンヌ・オズワルドの歌に出合った(レコードで)ことで、自分のやりたいものがつかめました。当分は行ったり来たりでしょう。日本の歌からも何かをみつきたい」という。

薩めぐみ帰国

シャンソン歌手の薩めぐみ(さめぐみ)写真)が五年ぶりに帰国し、二十八日と二十九日に東京・渋谷の西武劇場でリサイタルをひらく。

彼女は札幌出身で二十七歳。昭

和四十三年、早稲田大学商学部在学中に第五回シャンソン・コンクールで優勝、卒業後、四十五年に渡仏した。

あちうでもクラブやテレビ、ラジオなどで歌っているが、よくこれと同じ内容になる。

東京28、29日



薩めぐみ、日本で初のシャ
ンソン・リサイタル

早大3年在学中六八年に第5回

ジャンソン・コンクールに優勝し卒業した七〇年10月単身パリに渡ったジャンソン歌手、薩めぐみが5年ぶりに帰国して日本で初のステージを行なう。渡仏後、モンマルトルにある伝統あるクラブ「シエ・マ・クジヌ」で歌ったり、グレコ、バルバラらが歌っている店「ヴィラ・デスト」でムルージと共演、その他TV、ラジオと活躍してきた。「フランス・ジャンソン界の将来の大家」とか「彼女は日本に帰るが一度でも彼女の声に接したフランス人ならそれを悲しむ」などの数々の讃辞を得た彼女の今回のステージは、帰国直前の2月から3月にかけてパリの最も

自分に合った歌を

『30年代のパリ』を映して

シャンソン歌手の歌めぐり

が、パリから帰ってきた。目
大在学中にシャンソン・コン
クールに優勝、第二の加藤

四十五年秋、もうフランスでも歌われなくなつた古い歌を求めて、パリを訪れた彼女は、最も古

い町の二つ、マレー地区の小さなホテルで暮らした。

オランダ劇場やテレビは、シリアン・クレール、ミレイユ・マチューら若手の舞台、バルバラとかジャイルジュ・ブラッサンスの古手は、彼女の滞在中も一、二度しか大劇場に登場せず、テレビに

声歌手で、ミレイユ・マチューの
先生、ジャン・ルミエールに師
事。エディット・ピアフの伴奏も
した。このほかピアノリスト、クロ

「向二つの歌手には、それぞれ特定のファンがいるんです。ピア

「エイユ・グリュユ」で3週間（満員）行なったものとほとんど同じ。
「パリ三〇年代の古き良き時代をパリ

古い「エ・グ」で3週間（蕎

薩めぐみ
古いキヤ

ノエ・テートル「ラ・ヴ

パリへ……それが一番よく
察知する。腕がそれから、車身
の重厚、二二八、二二九日
にはさつて東京、芝の西
武劇場でサイタルを演ぶ。
パリのキフ・ティールで
のヌディが、そのまゝ再現
されるはずだ。彼女が若く一
月にはまだパリへ戻るという。
「三〇体のパリに生きたヌ
ディでアウール。そしてア
ヒトに捧げ
リサイタルの話題はこうだ
ねている。



「パリでも、日本でも、30年代の莖苎の
リを追っていきます」と話す薩めぐみ

てもシロいぬ、とこののは
 ありませぬ。キリヤのあやふせ
 たちは誠にいとおを、じつとへを
 破るのに。年毎にたへる
 すが、おおのため破るのは
 ないです。また、みな
 一生懸命にうしろに生きている
 ます。それだけの難も払って
 ますけど……。日本スズミ中心
 の仕事じゃあ、私は向い
 の敵が生き生きと身につけて
 人間じつ々しくなまし
 人身じつ々してシツカ
 い衣袴は、バリの古風屋でめけ

に住んでゐる一女性としてとらえ、表現してみよう」という内容で、三〇年代にバリで生きたアレヒト、コク下、プレヴェールに捧ぐ」という副題もついている。――自分には忠実に生きようとするために、おのずと世間のきまりからはみ出してしまふ人々に對する愛――を歌つていくという彼女。今後が大いに楽しみな歌手だ。

（公演日） 4月28、29日・西武劇

三〇年代のバリといえは「巴里祭」(ルネ・クレール監督)、「ミモザ館」(ジャック・フェデー監督)などの名画が生み出され



「ノ
香」

たココ・シヤネルデザインの三〇年代製。こんどのリサイタル後、彼女は横浜のイギリス館のような小さな小屋で歌うという。

場（問合せ）ハッピー・ジョー
ク 03（476）〇二三七

★薩めぐみがパリから帰る★

懐かしい時代のシャンソンを

日本で初めてリサイタル開く

シャンソン・コンクールに優勝したあと単身パリに渡って歌っていた薩めぐみが、日本では初めてのリサイタルを開くために帰国した。このリサイタルはあちらのカレール、プレヒトに捧ぐ、というテーマなんです。古き良き時代、の歌を集めてね。このと



ころずっと、こういうものしか歌っていないんです」

パリに渡ったのが七〇年。はじめはシェ・マ・クジヌというキャバレー(クラブ)で「枯葉」とか「回転木馬」などポピュラーなものを歌っていたが、ジャン・ルミエールという先生に習っていると三〇年代の作品に触れて、他の歌にほとんど興味をなくしたという。

「ダミアがいてピカソがいて、コクトーにエリック・サティ……。私なりのあこがれもあったんですよか」

グレコやバルバラなどが歌っているクラブ「ピラ・デスト」では、ムルージと共演したし、「フランス号」という客船のダイニングやテレビ、ラジオにも出演している。三週間の連続リサイタルを開いたのはビエイユ・グリーユというカフェ・テアトル。

三〇年代の歌というのは、あ

▲五年ぶりに帰国した薩めぐみ

(読売新聞社で)

ちらでも難しいものとされている。こわいもの知らずで歌ってしまったという感じが、評価された」という実感はありました

めぐみは日本人だが、フランス人が最も難しいと思っている三〇年代の歌をフランス語でこなし、た「(フィガロ紙)」という評価。同行するクロード・ローランは以前ピアフの伴奏をつとめていた人。フランス人の伴奏で、フランス語で、フランスの歌を日本で歌うわけだ。プレベールの「枯葉」のほか「マッキー哀歌」(プレヒト)、「メイドのアンナ」(コクトー)など約二十曲を、飾りなし、スポットだけの照明で歌う。

近く、彼女がパリでレコーディングしたアルバムも出ることになった。リサイタルは西武劇場で二十八日午後七時、二十九日同五時の二回。五月十九、二十、二十一日にディナー・ショー(渋谷・カサビアンカ)も開く。

本場のシャンソンを

♪.....♪.....♪.....♪

パリ帰り薩めぐみさん

来月5、6日リサイタル



札幌出身の新進シャンソン歌手・薩めぐみさんが、札幌・STVホールで念願のシャンソン・リサイタルを来月五、六の両日(午後六時三十分)開くことになり、十五日読売新聞北海道支社を訪れ「パリ仕込みのシャンソンを……」と、公演に意欲を燃やしていた。

本場の味をじっくり聞かせたいと意欲をみせる薩めぐみさん(読売新聞北海道支社で)

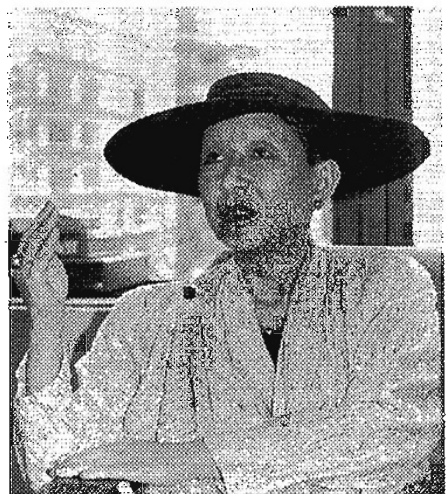
シャンソン研究会に籍を置き、シャンソン・コンクールに挑戦して見事優勝。これをきっかけに四十五年十月、単身パリに出かけ、四年間みづから本場のシャンソンを勉強し、さる三月に帰国した。四月末に東京・西武劇場、七月には京都・府立芸術文化会館でリサイタルを開いた。

久しぶりに札幌の土を踏んだ薩めぐみさんは「やはり札幌の空気が一番合うんですよ」と、本番を前に一層とったところ。しかし、リサイタルの話になると目を輝かせ「札幌では私のすべてを聞かせたい」と意欲的だ。リサイタルには三十年代のナンバーを中心に「プレヒト」「コクトー」「H・G・クルーザー」など二十四、五曲を披露する

シャンソン歌手、薩めぐみのコンサートが二十日渋谷区西武劇場で開かれた。薩めぐみはスポーツニッポン新聞社後援の第1回「日本シャンソンコンクール」(昭和四十二年)で優勝して以来、パリに渡って一九三〇年代のシャンソンを中心に活動し、その成果を日本にシャンソン・ファンに伝えている。

(第3種郵便物認可)

11年ぶりにふるさと・札幌でコンサートを開く薩めぐみ



札幌出身のシャンソン歌手

薩めぐみ

ほぼ里帰り。道新スポーツを訪ね、パリでの活動と近況、9月下旬に札幌で開くコンサートについて話した。渡仏当時は「日本のクレイジー」と呼ばれていた。11年ぶりの札幌でのコンサート。

11年ぶり、故郷でコンサート

「枯れ葉」やオリジナル10数曲

仏語でプリ聴かせます

来月25、26日 札幌グランドホテルで

シン・ポ・ス・ト・ル

1991年(平成3年)8月13日(火曜日)

薩めぐみ"パリ"を歌う

日本で初のコンサート

表情豊かに14曲

五年間で仕込んだ成果を

日本では初のコンサートであるこのコンサートも三〇年代のパリに生きたコクトー、フレネル、そして「パリに暮らす」と題がつけられている黒い髪のロング・ドレス、右肩に大きな赤いバラをついて登場した薩めぐみは「マッキー歌」を皮切りに、十四曲を歌った。歌う歌の内容を日本語で説明してから歌い出す。わずかに手振りをいれるだけで、言葉をシャーンと押はして顔の表情がたいへん豊か。



表情豊かにパリ仕込みのシャンソンを披露する薩めぐみ

う有名なカフェ・テートルで開いて、パリでの評判はうなぎ登り。薩めぐみは「パリから出た旅路がある」で。

ので、年に一回はパリへ行き来す。けれど今は日本です。月に一回くらい、あのあつたでミスと娘をやらせていきたいと思っています。いずれにしても三〇年代のシャンソンを聴いていくことがなり手」と語っていた。コンサートは、八月二十九日まで。

サートでは、仏大統領の甥(おい)のフレデリック・ミッテラン氏が作詞した「地獄の時差水」と、薩本人が作詞した「私の個人広告」を新曲として用意した。

「薩めぐみ、パリより風狂の世界」は、9月25、26日札幌グランドホテルで、25日はディナー・コンサート、26日は午後6時30分開演、3万5000円(洋食フルコース)。26日はシャンパン・コンサート、午後7時開演、5000円。チケットは札幌市内の有名ブレイカイドと、グランドホテルで発売中。

オリジナル10数曲と「ふだんは歌わない」というラストナンバー・ナンバー「枯れ葉」などを一時間半、たっぷりと聴かせる。フランスでは6歳からファンがいる薩は「若い人たちがぜひいらして下さい」とアピールしていた。

語で歌います。(内容は)少しは語りやパンフレットで伝えるけれど、あまり分らない方がいんじゃないですか。分かる人みんなびくびくして、心臓発作を起こしちゃうわ」。

☆薩めぐみ☆ シャンソン・ロ
ンクール(六八年)に優勝し、パリ
でのどをみがいていたが、このほ
ど五年ぶりに帰国。東京・渋谷の西
武劇場でのリサイタル(二十八、
二十九の両日)を皮切りに、演奏
活動を開始する。

そのリサイタルでは「シャンソ
ンのなかのシャンソン」といわれ
る一九三〇年代の名曲を歌うが、
これは帰国寸前、パリで最も古い
キャフェ・テアトル「ヴィユ・グ
リイユ」で、三週間続演して、フ
ランス人以上のシャンソンと折紙
をつけられたステージをそのまま
再現する。

三〇年代の歌には三〇年代のド
レスで、この夜の衣装は、パリ
の古着屋で五年間探しつづけて見
つけたココ・シャネル製作のドレ
スを着用に及ぶ。



プレベール邸で未亡人のジャニーヌさん(左)
と談笑する薩めぐみさん一広瀬裕子さん写す

プレベール未亡人も称賛

「パリに出演、薩めぐみの名はジャ
ニーヌ愛好家の間に、静かに浸透
しつつあるという。」
そして、めぐみの活躍に人一倍
の祝福を送るのが、プレベール未
亡人のジャニーヌさんだ。「ジャ
ニーヌは、めぐみには会えなかった
けれど、その才能にははるかに上
なわ」というジャニーヌさんは、
薩めぐみを時々パリの自宅に招待す
る。
「プレベール邸は有名なキャバレ
の祝儀を送るのが、プレベール未
亡人のジャニーヌさんだ。『ジャ
ニーヌは、めぐみには会えなかった
けれど、その才能にははるかに上
なわ』という詩を特に
愛するのよ。ジャニーヌさんの話
にはしばしば「パリパリ」とい
言葉がまじる。『ジャックはナチ
占領下の厳しい時代に、あの詩を
書いたのよ。』と、人々は言う。
「ジャックの詩を自由に使って
よい」というのは、ジャニーヌ
さんの思いのこもった言葉だ。こ
うしてプレベールの詩の生きた解説
に通ずる。」

多彩な演出うける

薩めぐみリサイタル



パリから帰国した薩めぐみ けていた。
「写真のシャンソン・リサ 二十八日夜は定席四百八十
イタルが に対し立ち見が百人を超える
四月二十 盛況ぶり。黒ずくめ、胸に赤
八二十 大きなバラをつけた薩は
全部フランス語。正確な発音
で、パントマイムで鍛えたた
けに全体から出す歌唱が
ドラマチックだ。マイクなし
も三曲あり、ときには歌い終
わりにエコーライザーをかける
など、多彩な演出で聴き手の
心に浸透させてやうとする。
会場から合の手が入り、
それを受けて歌手が話を続け
る場面もあった。シャンソン、
演劇界の人の顔もみえ、少な
からず刺激となっているよう
す。歌と動き、フィリッパ
がうまくなった。ただフラン
ス語ばかりじゃ、自満足に陥
る。『今日でお別れの作曲
者、宇井あきら氏』と今後の展
開を期待する声も聞かれた。

二つのシャンソン・リサイタルを聴いた。五年ぶりにパリか
の帰った、若い女性歌手薩めぐみ 五月六日には帝劇でベテラン高
みは西武劇場で四月二十八、九 ドラマの唄」にはじまる第二部
両日、帰国初リサイタル。三〇 「大正から昭和の ロマンを歌
年代のパリに生きたコクトー、 うで、まさに独壇場の味。そ
プレベール、フレビットに捧ぐー の前後には「イエスタデー」、
というサブタイトル 「モン・パリ」な
ル通り、三人の詩 ど新旧のヒット曲
人が書いた歌を持 ン・リサイタル こちらは外国の歌
集したわけだが、プログラムに もせんが日本語で歌う。その正
も作曲者の名前を記さない徹底 政法な歌のうまさ。『年の功
ぶりで勿論せんが原語で歌う。 ともいえるが、異国の歌を完
邦訳の内容は配布されるし、曲 全に日本人である自分の物に
の合間に彼女自身が解説もす なし切ったのは立派で、見事に
るので決して『分らない』とい 日本人』を忘れさせた薩めぐ
う(ことはないし、日本人離れし みのうまさと対照的だった。

本場で絶賛の実力派

パリ

いつもマイペース

商業主義に
背をむけて

日本からやってきたシャンソンの新しい擁護者―と書きたてるなど、パリの各紙が絶賛をおしまぬ話題の歌手、薩めぐみがかもつか帰国している。TBSが「天皇の料理番」のテーマ曲を歌わせていることもあって、最近では日本でも一般に知られるようになったが、さきごろフランスで発売になった二枚目のLP「JE M'ENFICHE (ジュ・メイム)」も日本の輸入盤店に入ってきていて、これも好評を博している。こうなれば、日本のレコード会社からLP発売をす



歌については一徹だが、会えばやさしい、シャンソンの薩めぐみ（東京・六本木で）

シャンソン歌手 薩めぐみ 里帰り中

いう。

ハスキーで深い声。それでいて強い意思のある歌に「枯葉」の作詞家で、名作「天井桟敷の人々」「霧の波止場」のシナリオ作家のジャック・プレヴェールがピツクリし、死に際してわざわざ彼女のため詩を残したほど。

今はマリアンヌ・オズワルドという女性歌手伝記「私は生きることを学ばなかった」の翻訳をしている。依然として形にはまらず生きていくことを念頭においているようすが、この仕事にしても「私なまけものだから、いつ完成できるかしらねえ」。ちなみにTBSの主題歌「風ノルマンディ」はジャパン・レコードで発売中。間もなく離日する。

た。偶然出会った作曲家でありピアノストのエミール・ステルンに「あなたの声はシャンソンに向いている」と言われて、ともかくシャンソンを歌いはじめた。彼女が20歳のときのことだ。その年、第5回シヤンソン・コンクールに優勝し、まだ在学中だったがプロとしてデビュー。

「別に衝撃的な出会いがあったわけではなく、様々な人との様々な出会いの積み重ねで今の私があるんですね。当時から気になる人はバルバラだけ、憧れたり、こうなりたいかと思っただけではないです。何となく成り行きて歌う、忙しい日本での毎日に見切りをつけて、きちんと歌の勉強をするためにパリへ旅立った。22歳、大学を卒業した直後のことだった。『若いときに向こうへ行つたので、フランス語も満足に話せない、かなり白紙の状態でした。それがよかったんですね。22歳の自分だから行けたわけです。しつかり身につけようとして身につくものでもないと思います。学校なんかのシステム化した勉強は好きじゃない。すべてがこやしになると思います。どんなささやかなことも、東京にいたって、パリにいたって、

「好きな人は、物事をはつきり言う人。お世辞を言わない人。生き方を持っている人。ブランド志向の人はイヤですね」



パリで彼女が最初に学んだのはバントマイムとモダンダンス。豊かな表現力を駆使して熱唱する彼女は決して客を飽きさせない。「私の歌を、どう受け取るかはお客さんが決めること」ときっぱりと彼女は言う



どこにいても同じこと。自分がとりえず選んだ、その道のためなら、ホームシックになる暇なんかありませんでした」

私の人生は、すばらしい “出会い”の連続でした

物事にこだわらない、しなやかな感性を持つ彼女は、いろいろな個性をのみ込んでいくパリで、伸び伸びと才能を開花させた。今年のはじめ、フレウエルとローラン・トポール（『幻の下宿人』で知られる作家）を歌ったリサイタルも絶賛された。「大衆的なもの、インテリっぽいものもと分かれているけど、ジャンルなんかどうでもいいわけです。レコードも必要なければ売ればいい。大衆的に受け入れられようとは思っていないし、どんな芸術家もだれからも気にいられようってのは無理ですよ。人並みに迷いはあります、私にだって。やる、やめないなんて決める必要もないし、5年間歌わないで、また歌ったっていいと思う。私が日本の芸能界に合わせなくちゃいけないってことはないし、大きなレコード会社のローテーションに私の人生の一部が振り回されるのはとてもないこと。私のコンサートもレコードも手作りですから、手作りは手作りの作り方をすればいいと思います」

謎めいた不思議な女性、おおよそ日常からかけ離れたような女性、見る者、聴く者を30年代に引き戻し包み込んでしまう薩めぐみ。だが彼女が望んで選んだ道は本物の歌をうたいたい、という単純にして明快、一点の曇りもない。

「私の人生は、すべてすばらしい出会いの連続でした。そう、主人とも……。出会うた人の中で最も尊敬しているのは主人です。主人にしてもらったことを返してあげたいと思う。口うるさい人生の教師。でも主人がいたから今までやってこれたんです。『大人の女性』を感じさせる彼女が、頬を赤らめ、こんなにも素直に言うことが少し不思議だった。

愛と人生を謳うのがシャンソンなら、彼女こそシャンソンにほかならない、といえるのではないだろうか。

シャンソン歌手

薩
めぐみ

M・S「私もそうなんですよ。モレシヤンさ

んに会うと、『ああ！ モレシャンさん』
って、すごく嬉しくなるような。」

F・M「それが、単に私はフランス人で東京

M・S「わかるわ、とても。私はモレシヤ

「……なんて思います。」

F・M「どんなに、自分が好きな土地でもや

にりカイコクジンを意識させられる時ってあるでしょ。そんな時、どんなに自分がガンコに生きていても、弱気になってしまう時ってあります。だから、薩さんと会うと、そんな生き方に対する情熱のルネッサンス(再生)を感じてホッとします。」

M・S「モレシヤンさんは忘れているかもし

れないけど、二年ぐらい前に話してくれたことで忘れられないことがあるんです。そ

れは、モレシヤンさんが、アガタちゃんを抱えて、離婚した頃、仕事を見つげなくてはならなかった時の話。何も腕に技術がなかったので、タイプを習おうと思われたんですよ。」

「F・M」そうそう、私もあのことは決して忘

おうと思つて友達に相談したら、その友達がこう言つてくれたの、『フランソワーズ、あなたがなくては出来なことがあるから、それが出来るまでタイプを習つたりして、安易な技術を身につけない方がいい。あなたがタイプを習つたら、一生秘書だけで終つてしまふのよ』って。」

M・S「それを聞いた頃、私も少し迷ってい

た時期でしたので、とても力強く感じて『私も妥協しない』って思ったの。」

F・M「それで、今やっとなさんしか出来ないことが、出来るようになったのね。ブレベールの歌を聞いた時『ああ、やっとな

71

ジャック・プレヴェール
にみこまれた日本女性

1966 南青山 5-10-6 03-499

薩めぐみを知っているだろうか。彼女は早稲田大学在学中に第5回ジャンソン・コンクールで優勝。その後、フランスに渡り、確かな評価を得ている。詩人、ジャック・ブレヴェール（1900—1977）—イブ・モンタンの歌った「枯葉」はあまりに有名。シナリオ作家としても「天井桟敷の人々」、「霧の渡止場」を書いている。—が、テレビで見た、彼女の少しハスキーな、けれど深い声に感動。彼女に未発表の詩を送っている。もともと彼女の手許に詩が届いたのは、ブレヴェールの死後8カ月目のことだった。病床の彼が人を介して搜したが、不首尾に終わったらしい。

これが「ジャック・フレウエル／＼
薩めぐみ」を制作するきっかけになっ
た。彼女の弁によれば「流れすぎて行
く時の漕にたたずむ人間の心象風景」
がうたわれている。契約の関係上、残
念ながら、本国フランスでしかこのレ
コードは発売されない。日本では下記
へ。『バイド・バイバー・ハウス』港区

雰囲気は30年代アール・ヌーヴォーの豪華

ふ、あとの分を東で暮らす。その東家の信長は、白雲山のツートインでデザインする。そのころ、本格的なニュー・ウーブなのである。もっとも、この人はたまたまおられたが、

「それ、レナに詩をプレゼントされて、それを歌う」といことは、

と驚かされ、ほとんづらん、山、のマコトが、「フリのピロイ」の「ワケウツ」に、

ヤンソンの護衛者（ヘルム）と尊とあるといふ。

「こゝろが、ひびり、ンデレ、」

だが、平然としているようにみえる。

[illegible]

魔めぐみ

フレベールの遺言で本場ハリでシャンソンを歌う薩めぐみ 激賞をみやげに日本へ再上陸



30年代ファッションでうたう

三〇年代のファッションというのか。ショートカットの頭に、ピタリ斜めにかぶった小さな帽子。シヨールも、服もすべて黒。唇、マニキュアも黒に近いバラ色。小柄。小さな白い顔。眉をそつ

た目は、淡いブルーでふちどられてる。その大きな目で、ヒタツと相手の目を見つめながら、低い声で話す。

最近、フレベール、トポール、コクトー、デスノス、プレヒトな

ど文学的な詩を歌い、本場のパリで話題を呼んでいる。最近では今年二月、エスパース・プレベール劇場のこけら落としや、ジェラルド・フィリップ記念劇場でリサイタルを開き、好評を博した。この七月、東京でもリサイタルを開く。「枯れ葉」の詩人であり劇作家のジャック・プレベールが、生前、病床で彼女の歌をテレビで聴き、「かつてこれほどまでに自分の詩を理解し、本質に肉薄した歌手は珍しい」と評し、めぐみさんを探したが、見つけ出すことができないまま三年前に亡くなった。その八カ月後、プレベール夫人のジャーヌさんが彼女を探し当て、プ

レベールの未発表の詩を自由に使うようにという、信じられない遺言を伝えた。

「それは、もうびっくりしました。プレベールは私にとって憧れの人。生前にお会いできなかったのがとても残念です。プレベールの詩を伝統的な方法で、あのイブ・モンタンが完璧なまでに歌っています。だから私は、八〇年代の新しい曲想で歌おうと、若手の作曲家とシンセサイザーなどを取り入れてレコードを作りました」

それが「ジャック・プレベール・薩めぐみ」というLPで、今春、フランスのリリオン社から発売され、日本へも輸入された。

めぐみさんは、昭和二十三年、札幌で生まれた。早大商学部三年のとき、東京で偶然に知り合ったフランス人ピアニストに「あなたの声はシャンソンにピッタリ。

歌って見たら」と勧められ、石井好子さんの音楽事務所に紹介された。

わずか二カ月のレッスンで、日本におけるシャンソン歌手の登竜門である第五回シャンソン・コンクールで優勝。二十歳だった。卒業後も同事務所に所属して、あちこちのシャンソン喫茶などで歌ったり、レコードもシングル盤で四枚出した。が、四十五年十月、本場で勉強を、とパリへ。

フランス語はもちろん、パントマイムや音楽の学校にも通って修業を積んだ。かたわら、カフェ・テアトルと呼ばれるパリにたくさんある小劇場でうたい、少しずつ足場をかためた。二年くらい前から、新聞、雑誌で評価を受けるようになり、今年二月のリサイタルでは、各紙で絶賛された。「沈滞するパリ・シャンソン界

PEOPLE



NOW

聴く人を「復古調の世界」へ引きざり込むシャンソン歌手

薩めぐみ

コクトーやブレヒト、プレヴェールを歌い続け、フランスで絶賛されている薩めぐみが、日本でも注目されはじめた。黒いローブに身を包み、タバコをくゆらす彼女は、どこか謎めいて、不可思議な魅力を秘めている。



20年、30年代ころのアル・ジャコに大変な興味を
持つ彼女。世田谷の自宅に設計もすべてアル・
ジャコでまわって、シングルに黒で統一している

プレヴェールは、ついに彼女と
出会うことはなかった……

「シャンソンは好きだったことはいない、
今も好きじゃないですね。90%のシャンソ
ンはきらいですね。めったにシャンソンの
レコードなんか聴かないです。パリという街
も好きで行ったわけじゃなくて、フランスの
歌をうたうことを選んだのだから、じゃあ、
パリに行くのがいいたと思っただけです」

シャンソン歌手、薩めぐみは、こう語り
はじめた。ゆつくり濃みなく話す、その声は、
ちよつとハスキーがかかって低い。シヨート
ヘアを黒いベレーでおおい、黒と白のニッ
ト・アンサンブルに身を包んで、タバコをく
ゆらす彼女は、大人の女のエレガンスと貫

禄を無理なくかもしだす、マレーネ・ディ
ートリッヒのようにモノトーンの似合う女、
ふと、そんな考えが頭をかすめた。彼女は
パリでドイツ女性と間違われるのだという。
彼女の中のとこりんとした毅然とした態
度、潔さみたいなものが、そう思わせるの
かもしれない。

薩めぐみ、この名前を耳にした人は、日
本ではまだ少ないかもしれない。5年前に
西武劇場で2日間のリサイタルを超満員に
し、今年7月に2度目のリサイタルを同じ
西武劇場で開き大成功を収めた。10年前に
渡仏してから、日本とフランスを行き来し
つつ、シャンソンを歌い続けている。

フランスでの彼女の人気は相当なものだ。
「聴衆をまるごと魔法にかけるようなすば
らしいステージだ。たったの5秒でメグミ

の30年代のローブのポケットにすい込まれ
てしまう」(ウイークエンド・ル・マタン紙)
「メグミ・サツ……パリが真にパリなら、そ
してそのパリが彼女を正當に評価さえすれ
ば、メグミは今すぐにも、パリのヒロイン
になるだろう」(リベラシオン紙)。シ
ニカルなフランス人が、このように彼女を
絶賛するのは異例とさえいえる。

フランスで暮らしはじめて1年後、ディナ
ー・シヨールに出演、自分の歌いたい歌しかう
たわない彼女は、ジャン・コクトーやブル
トンなど文学性の高い詩を、小劇場で歌い
続けてきた。1975年、プレヴェールやデス
ノ、ポール・フォールを歌う3週間のリサ
イタル。1978年、ジェラルド・フィリップ劇
場でのリサイタル。TVで歌う彼女を見た
ジャック・プレヴェールは彼女を探し続け
た。だがついに会えることなくプレヴェール
はこの世を去ったのだ。彼の映画「天井棧
敷の人々」のバチストとフランスのよう
に。「歌うつてのは一種の片思い。向こうも私に
片思いをしてたわけですよ。彼の死後、彼
が私を探して見つかったことがでずに死ん
だ話を聞いて、仕方ないと思いました。彼の
奥様は今、シエルブルの近くの一軒家に
たった一人て暮らしているんです。とても
気の毒いかなって、プレヴェールの作品をレ
コードにだすのでデモテープを持っていつ
たら涙を流して喜んでくれました」

メリア人、純粋なフランス人のシャンソン
歌手なんていないですね。ピカソだつてそ
うでしょ。パリというのは、いろいろな国
の芸術家を受け入れてきた街です。そうい
う芸術家たちを、パリが育てた、という気
持ちは皆持っていますね。国籍は関係ない
と思う。やっつけることさえよければ、認め
られます」

どこにいても同じ。ホーム
シックになる暇などない！

昭和23年、札幌で生まれ、普通の家庭
で彼女は育った。彼女の母も黒を好んで身
につけ、今もイッセイ・ミヤケやコム・デ
・ギャルソン、ワイズなどの洋服を着こなす
モダンな女性である。

両親にすすめられるままにミッシェン系の
高校へ進学し、早稲田大学商学部へと進む。
「両親も私を女らしく育てようとは思わな
かったようです。小学校1年くらいから大
学へ行つて構わないと言われていました。
当時は女子が大学へ行くのは珍しいこと
でしたから。人がどう言おうと気にしない、
人のマナをしても仕方ないというふう
に育てられたんです。北海道という土地柄で
いうか、両親も私も物事にこだわらないで
すね、大ざっぱというか、一般的な常識は
あまり気にしません」

彼女とシャンソンとの出会いは大学時代。
当時、彼女は作られたばかりのシャンソン
研究会に所属していた。だがいくつも顔を
だしているサークルのひとつにすぎなかつ



みせかけの享楽はいらない

前に大きなベンギンの置物。めぐみは黒い服。
パリのテレビで唄っているめぐみの唄を聴いたプレヴェールは、めぐみを探した。めぐみこそ自分の詩を唄ってくれる一人の

黒と白。めぐみの衣装も黒と白。レースの胸み込みの間からめぐみの白い肌が人工の町の中でより白く輝いた。めぐみの肌は、ある時は小麦色の灼けた肌になり、またある時は、山中に降り積った雪の白さのように光った。肌と声と、そしてめぐみの顔の表情のひびひとつが、生命の呼吸を感じさせた。めぐみの声はなにたどられるだろう。一言で言うならエモーショナルな声でも言おうか。少しひび割れた、そのひび割れた中へ、聴く者を震えさすリズムにはいられない強さを持つていた。劇場のホールの中で、一人一人別の仕事をしながら、またそれぞれにめぐみの練習し続ける声と姿に、囚われてしまっていた。曲と曲の間、一番後の席に座っている、私の方をちらとみて、めぐみは、また明日のため唄を唄う。唄であつたり、歌であつたり、また叫びであつたりした。それは、唄の練習というより、めぐみの全肉体と精神を駆使した闘いであるのだと思つた。そこには貴族の持つ典雅さも、高貴さも、また下卑も熱情も冷たさもあつた。

めぐみは同じ曲をくり返し、くり返し唄つた。いまだ私が一度も聴いたことのない唄であつた。ほんの短いフレーズを何度も何度もくり返した。汗ひとつかかず、私には声の乱れも、リズムの乱れも感じさせなかった。それは、はじめて私を抱えためぐみの正確な、力強い足音に似ていた。
この練習風景をみながら、めぐみのいままで生きてきた軌跡をきく必要がないように思えた。多分、人との出会いも別れも、愛も憎しみも、全てがこの唄にあるのだと思つた。ピアノは、ピアノを叩きながら、サンディッチをつまみ、めぐみは、客席に座ってコーヒを飲み、そしてまた、ピアノと唄がはじまつた。

プレヴェールの遺言

霧ぐみの四日間のリサイタルは、全席切符が売り切れた。空席を待つ客で、ホールの入口はあふれた。その二日目、めぐみの唄をきいた。
「夢の遊園地、影の航海」
めぐみは、このリサイタルで「流れすぎ行く時の雨」に代る人間の心象風景をうたいたい」という。

第一部、プレヴェールの詩に曲をつけた

めぐみは、このリサイタルで「流れすぎ行く時の雨」に代る人間の心象風景をうたいたい」という。

歌手だとプレヴェールは思つたという。プレヴェールがめぐみを探して見ると、ちょうどめぐみは日本に帰つてきていた。再びパリに戻つためぐみのところに、プレヴェールの親友のジャーナリストが、プレヴェールの詩を持って訪ねてきた。プレヴェールは二月前に亡くなつていて、これは彼の遺言だ、と親友はプレヴェールの詩を渡したという。めぐみはそれの中からシェール・レアリスムの一連の作品を選んで、プログレッシブ・ロックの作曲家ジャン・クロード・ギゼリに曲の制作をたのんだ。
幼くして隠れた旅行者
彼は「幻影」の扉を押した
そして無愛想な影ばかりの風景の
いつもながらの残骸のなかに
微笑しながらその異常な旅をしつづけ
歌うたいながら燃えたつ大砂漠を渡つていく
（訳・藤田敏雄）
「プレヴェールの詩って好きよ」
「どこが？ 彼がめぐみに惚れてんだから？」
「それも、あるかも知れない。でも直接彼に会つたことないけど、彼は青春を知っている」

人だと思ふの」
「青春」
「青春って、年が若いという物理的なことだけじゃなく、人間が生きてくる以上持つていなければならない一番大切なものだと思うの。可能性に賭けていく情熱みたいなものかしら。プレヴェールにはそれがあるのね。いまだ未来に挑戦していく力が……」
めぐみは、私が彼女のいままでの生き方を聞き出すようにするまっけを、どこかで消していつているような気がした。
舞台上唄い続けるめぐみをみながら、めぐみの唄を聴きながら、一昨日、めぐみの練習の合間に交わした、彼女との会話を私は思い出していた。
めぐみのリサイタルは、ほんの短い唄と唄との間の他は、ただ唄だけで進んでいった。語らなければ、唄の他は、言葉がなかった。一言で言えば唄びがないとでも言おうか。全ての言葉をそぎ落した舞台だった。
「唄」そのもののリサイタル
「真実の心を唄うのにみせかけの享楽はいらない。これプレヴェールの言葉なの。この言葉がとっても好きよ。本当だと思ふの。この

夜明けに漂う東の間の海岸
新月と昇りはじめたばかりの太陽が
順ぐりに訪れて
水浴びする
春の一分は
しばしばずつと長いもの
12月の一週間
10月の一週間
7月の一年
2月の一月よりも
今までも これからも 常にかわらぬ遊牧の民
心の思い出
血の記憶もどもどもに
バスボートも唇もなしに旅をする
完全に「時の国」とは
無縁のままに
（訳・藤田敏雄）
定刻より前に、黒い幕が上がり、めぐみは薄暗い舞台上唄いはじめた。挨拶もなし。舞台の上は黒と白の二つのソファ。二台のピアノ、ピアノの上だけが少し明るい。ソファの

びこんだ。この西武劇場で、明日から霧ぐみはリサイタルを開く。今日の午後から、そのグランドホールはじまっていたはずだった。
霧ぐみに会ふときめから、私は幾度もめぐみの姿や顔や髪を想像していた。どう思ひ描いて、一面を能面のような写真の顔に思ひ浮かべた。そしてめぐみについて知ればほどほどで、パリで唄っているといふことだけ、年が何歳なのか、歌手としての実力、知名度、ほとんど知らなかった。自身のか、結婚してゐるのか、どこか生まれなのか、シャンソンを誰が教わったのか、音楽学校出身なのか、そして、彼女がシャンソン歌手といふのか、どうやら知らなかった。パリで唄っているから、シャンソンだろう、そんな確かな知識しかなかった。ときどき、私に思つた。会前に知識を仕入れることが必要なのか、と。今度の場合は全く知識はゼロにした。そして会いたかつた。

たつた一人歩き続けている足音
西武劇場はあんなに九階にあつた。大きな荷物運搬がらんとしたエスケーターで九階に上りながら、東京の街をみたと私をきき出そうとしたことだろう。そして、それを成功させたこともあつた。だが、それが果して何になつたのだらう。その人の人生の奇蹟を無意味な理屈の中にひき出して書いて、それがその人の、そして読む人の何になつたのだらうと思ふ。私の何かになつたのだらうかと思ふ。その思いが、しきりに私を抱えるようになつた。その頃から私にわづか、シャンソン歌手誕生までの「お話」なんでもうたふかと思つた。めぐみが何も話してくれなくても、それはそれでいいのだと思つた。
全肉体と精神を駆使した闘い
私の名刺をみながら、その名刺をピアノの横に置いてあるパンダに放りこむように入れて、また私の前に戻つてきた。やはり、私は舞台の下からめぐみを見上げたままだった。
「いま、九州から唄いたんぞ」
めぐみは私の名刺をみたととき、私が九州から唄いたんぞときも、言葉を変えなかつた。私の名刺に九州の住所をみたととき、どの人も同じように、九州から？ とびつくりしてた。九州から東京に取材にくること

は、珍しさに違ひなかつた。めぐみは私が九州から取材にくること、東京のある町からこようと、同じ反応をみせたと違ひなかつた。全く驚いた様子を見せなかつた。
黒いストリート・ヘアを短くカットしためぐみは、日本の女にもみえし、フランスの女にもみえた。濃い赤色の口紅と同じ色のマニキュア。その下は肩の下目のまわりは薄い茶色のアイシャドウが影ついていた。少し上り上り目。光の強い巴里否のようなその目は、まさしく日本の女の目だと思つた。この日は、泣いたり笑ったりする目ではない、意志的をまっすぐ前をみつめる目だと思つた。
めぐみは、二人のフランス人のピアノリストに、一言、二言、フランス語で何か伝えている、マイクを手に持ったまま、客席におりてきて私と並んだ。細い小柄な女だった。ドレスの袖からみえる肩の骨が、小柄な身体に胸にはたくましく尖つてみえた。曲線を描いた背。
「昨日まで唄っていたの。日本に帰つてきたとたん病気がなつてしまつた。今日がはじめての唄合わせ。ほんとうにこんな音合わせは昨日まで終つてしまつた、いけなかつたの

は、珍しさに違ひなかつた。めぐみは私が九州から取材にくること、東京のある町からこようと、同じ反応をみせたと違ひなかつた。全く驚いた様子を見せなかつた。
黒いストリート・ヘアを短くカットしためぐみは、日本の女にもみえし、フランスの女にもみえた。濃い赤色の口紅と同じ色のマニキュア。その下は肩の下目のまわりは薄い茶色のアイシャドウが影ついていた。少し上り上り目。光の強い巴里否のようなその目は、まさしく日本の女の目だと思つた。この日は、泣いたり笑ったりする目ではない、意志的をまっすぐ前をみつめる目だと思つた。
めぐみは、二人のフランス人のピアノリストに、一言、二言、フランス語で何か伝えている、マイクを手に持ったまま、客席におりてきて私と並んだ。細い小柄な女だった。ドレスの袖からみえる肩の骨が、小柄な身体に胸にはたくましく尖つてみえた。曲線を描いた背。
「昨日まで唄っていたの。日本に帰つてきたとたん病気がなつてしまつた。今日がはじめての唄合わせ。ほんとうにこんな音合わせは昨日まで終つてしまつた、いけなかつたの

は、珍しさに違ひなかつた。めぐみは私が九州から取材にくること、東京のある町からこようと、同じ反応をみせたと違ひなかつた。全く驚いた様子を見せなかつた。
黒いストリート・ヘアを短くカットしためぐみは、日本の女にもみえし、フランスの女にもみえた。濃い赤色の口紅と同じ色のマニキュア。その下は肩の下目のまわりは薄い茶色のアイシャドウが影ついていた。少し上り上り目。光の強い巴里否のようなその目は、まさしく日本の女の目だと思つた。この日は、泣いたり笑ったりする目ではない、意志的をまっすぐ前をみつめる目だと思つた。
めぐみは、二人のフランス人のピアノリストに、一言、二言、フランス語で何か伝えている、マイクを手に持ったまま、客席におりてきて私と並んだ。細い小柄な女だった。ドレスの袖からみえる肩の骨が、小柄な身体に胸にはたくましく尖つてみえた。曲線を描いた背。
「昨日まで唄っていたの。日本に帰つてきたとたん病気がなつてしまつた。今日がはじめての唄合わせ。ほんとうにこんな音合わせは昨日まで終つてしまつた、いけなかつたの

は、珍しさに違ひなかつた。めぐみは私が九州から取材にくること、東京のある町からこようと、同じ反応をみせたと違ひなかつた。全く驚いた様子を見せなかつた。
黒いストリート・ヘアを短くカットしためぐみは、日本の女にもみえし、フランスの女にもみえた。濃い赤色の口紅と同じ色のマニキュア。その下は肩の下目のまわりは薄い茶色のアイシャドウが影ついていた。少し上り上り目。光の強い巴里否のようなその目は、まさしく日本の女の目だと思つた。この日は、泣いたり笑ったりする目ではない、意志的をまっすぐ前をみつめる目だと思つた。
めぐみは、二人のフランス人のピアノリストに、一言、二言、フランス語で何か伝えている、マイクを手に持ったまま、客席におりてきて私と並んだ。細い小柄な女だった。ドレスの袖からみえる肩の骨が、小柄な身体に胸にはたくましく尖つてみえた。曲線を描いた背。
「昨日まで唄っていたの。日本に帰つてきたとたん病気がなつてしまつた。今日がはじめての唄合わせ。ほんとうにこんな音合わせは昨日まで終つてしまつた、いけなかつたの

言葉に出会ったとき、私はパリにきてよかつたと思つたわ」

めぐみは早稲田大学に通っている頃シャンソンコンクールで一位になった。それほど正式にシャンソンを習ったわけではなかった。シャンソンコンクールで一位になった時からめぐみの人生がはじまった。

「学生だった頃、どんな仕事が入って、毎日毎日、あちこちかけ持ちしながら唄い続けたの。でも二年位した頃、どうしても我慢できなくて、シャンソンってこんなものじゃないのじゃないかって、味の素やお砂糖で味つけした甘つたるいものじゃないんじゃないかって」

めぐみは〈味の素〉で味つけした日本のシャンソンに我慢できなくなった。

パリへきて、日本の味つけしたシャンソンの甘さをそぎ落すことに懸命になった。

「でも、パリへきて、唄の勉強してそれほどしたわけでもないし、みんなが感心するような苦労話もないし、やはりお話すること何もないわね」

めぐみは、私の取材に応じながらも、幾度もお話すること何もないわね、とくり返した。めぐみは、いわゆる日本的な女の芸人の

苦労話は体質的に受けつけないものがあるのだろう。私もまた、めぐみに〈苦労話〉をきく気は失くしていた。

プレヴェールの詩を唄ったものが、第一部。第二部は、ブラック・ユーモア作家であり、画家でもあるローラン・トポールから贈られた詩に曲をつけたもの。

私は物の値打がわからない

でもそれはきつとよいことかも知れない
バラの値段がわかったら

その花びらを数えなければなくなる
から

私は物事の思い出を持たない

でもそれはきつとよいことかもしれない
だって一つのバラを思い出してみても
そこに花びらよりもトゲが残っているか
ら

めぐみのリサイタルは甘い感傷もおせじも客への媚びも、全てそぎ落した〈唄〉そのもののリサイタルだった。曲は全てオリジナル。アンコールを一曲唄って終った。ドレスは一部・二部とも黒。飾りは金のプレス・レットだけ。

〈能舞台のフィルターを経たシャンソン〉といえるかも知れない。

「ごめんなさい。何も話がなくて。でもいまは今度のリサイタルで選んだ詩がいまままでの全ての私の人生を詩っていると思つて。それしかないの」

パリに住み、時に日本に帰ってくる。そしてまたパリにも帰る、という。日本にくるともパリへ行くとも言わなかった。パリも日本もどちらとも帰るだった。めぐみが結婚しているのか、独身なのか、子供がいるのか、どこで生まれたのか、とうとう何もきかないままだった。

東京の街を眼下にみたとき、私を襲った怯えは多分人の人生の中へ土足で踏みこんでいく畏れだったのだろう。それは自分自身の未知の人生への畏れでもあると思う。

微笑しながらその異常な旅をしつづけ
歌うたいながら燃えたつ大砂漠を渡って
いく
(訳・窪田般彌)

背後でめぐみの唄がきこえ。その唄に私は押されて歩いていく。私の背後からめぐみの正確な足音が近づき、また遠ざかっていく。

(写真・浦 充伸)

らず絵画、文
 の都、巴里」
 だけの手によ
 十分に承知し
 本に於ては、
 助した日本女
 とだろ。外
 して、今、自
 ンのスローガ
 とって、薩
 雑誌の山高
 ファッション
 現在の流行
 レトロ（懐古
 という当時の
 デイアでの
 することによ
 ランス語で
 エールとい
 しか考えず
 はそれで非
 たま、時代

うだつていい
まえば……。
してもいい
なつてくれた
……、私の歌
なに好かれた
なり本質的な
、多くの優れ
た口調で言葉
でよ。わかつ
ることは違う
ちからも話を
言葉であるに



MÉGUMI SATSU L'HERITAGE PRÉVÉRT



プレヴェールの遺産・薩めぐみ

永瀧達治

Paris est tout petit pour ceux qui s'aime-
nt.『好いた同志にゃ、パリは狭すぎるもの。』

——映画『天井桟敷の人々』の自作のシナリオで、こんな名文句を書いたに因らず、詩人プレヴェールは遂に同じパリに住むメグミと出会うことはなかった。いや、彼らは文字通りの御対面という出会の形こそとれなかったが、メグミにとっては、彼女がプレヴェールの作品を歌い始めて以来、又、プレヴェールにとっては、病床のラジオ、テレビで、メグミの歌を聴き、姿を見て以来、ふたりの出会いはすでに存在していたといえよう。テレビで彼女を見た詩人は、自分の詩がこれほどまでに理解され本質に近い形で歌われたことに

感動し、ニコラ・バタイユなど幾人かの知人に、メグミ・サツなる女性歌手の消息を尋ねていた。『彼女なら私の詩が歌える。』——

まさか、傾倒する大詩人が、そんな言葉を、夫人に語りかけているとは知らぬ、メグミは、パリの小さなカフェ・テアトルで、プレヴェール、プレヒト、サティなど彼女自身に重復するアーチストの世界を歌っていた。勿論、例えば病床のプレヴェールにしても、彼が本気で捜そうとするなら、すでにシャンソン愛好家の間では、驚くべき才能と噂されていたメグミに会えないことはなかった。何しろ、『好いた同志にゃ、パリは狭すぎるもの。』だが、プレヴェールは持ち前の呑気な父さんぶりで、

で、まさか自分がすでに、死期に近付きつつあることも知らず、この惚れ込んだ歌手メグミ・サツの為に、新しい詩作をさえ考えていたのだった。『メグミと会う時には、彼女に新しい詩を手渡したい。』——そして、プレヴェールは一九七七年に、世を去った。『霧の波止場』『悪魔が夜来る』『天井桟敷の人々』……彼が手掛けた多くの映画シナリオに於て、男と女は運命によって出会い、運命によって別れてしまうが、メグミとのエピソードでは、はかなくもプレヴェール自身が、そのシナリオの主人公を演じてしまった。

彼の死後、プレヴェール未亡人は、詩人の遺志をメグミに伝え、彼のまだシャンソンに

さんの夢がかなった』って、思ってた嬉しいでした。本当におめでとう。」

M・S「いえ、まだこれから大変です。」

F・M「そうね。私とは違う仕事だけど、創作とか、フリーの仕事というのは、『これで安心』という時がなくて、成功すればするほど、恐ろしく感じますから。」

M・S「私、人間には組織の中で、自分の能力を生かせる人と自分ひとりでリスクを負いながら自分の能力を生かす人のタイプがあると思います。どちらがいいとは言えないけれど、自分がどちらかはつきりとかわかっていないと大変なことになりそう。」

F・M「そうね、私も 크리스チャン・ディオールやレブロン、シャネルなどで働いていましたが、今の店がずっとフランソワーズらしく生きていきますね。ただ、ひとりで生きていても、自分のことをちゃんとわかってくれる人達が身辺にいなかったら、私

なんか組織の外に出る勇氣は持てなかったでしょうね。特にウチの主人はそんな存在です。」

M・S「私も同感。特に御主人の永瀧さんのような方は、日本人でも珍しいぐらいい。」

F・M「フランス人でも珍しいわよ。(笑)でも、また、ウチのタツジのことを話すと、おノロケってしまいますから。」

M・S「あら、でも、愛情を持っている人のことをほめるのはとてもいいことですよ。」

F・M「そう、そうなんです。日本で自分の家族のことを話す時、ちょっと謙遜し過ぎですね。『バカな息子』がとか、『バカな女房』とか。フランスでは、『うちの子は頭が良くて、かわいくて』『うちの女房は美人で働き者で』って(笑)それはフランスのいいところです。悪いことも沢山ありますけどね。」

M・S「モレシャンさんと話をしている気持ちがいいのは、いつもどちらがいいなんて言

わないでしょう。ちゃんといい所、悪い所がわかっていて、人間としての話でしょ。それが大切ね。」

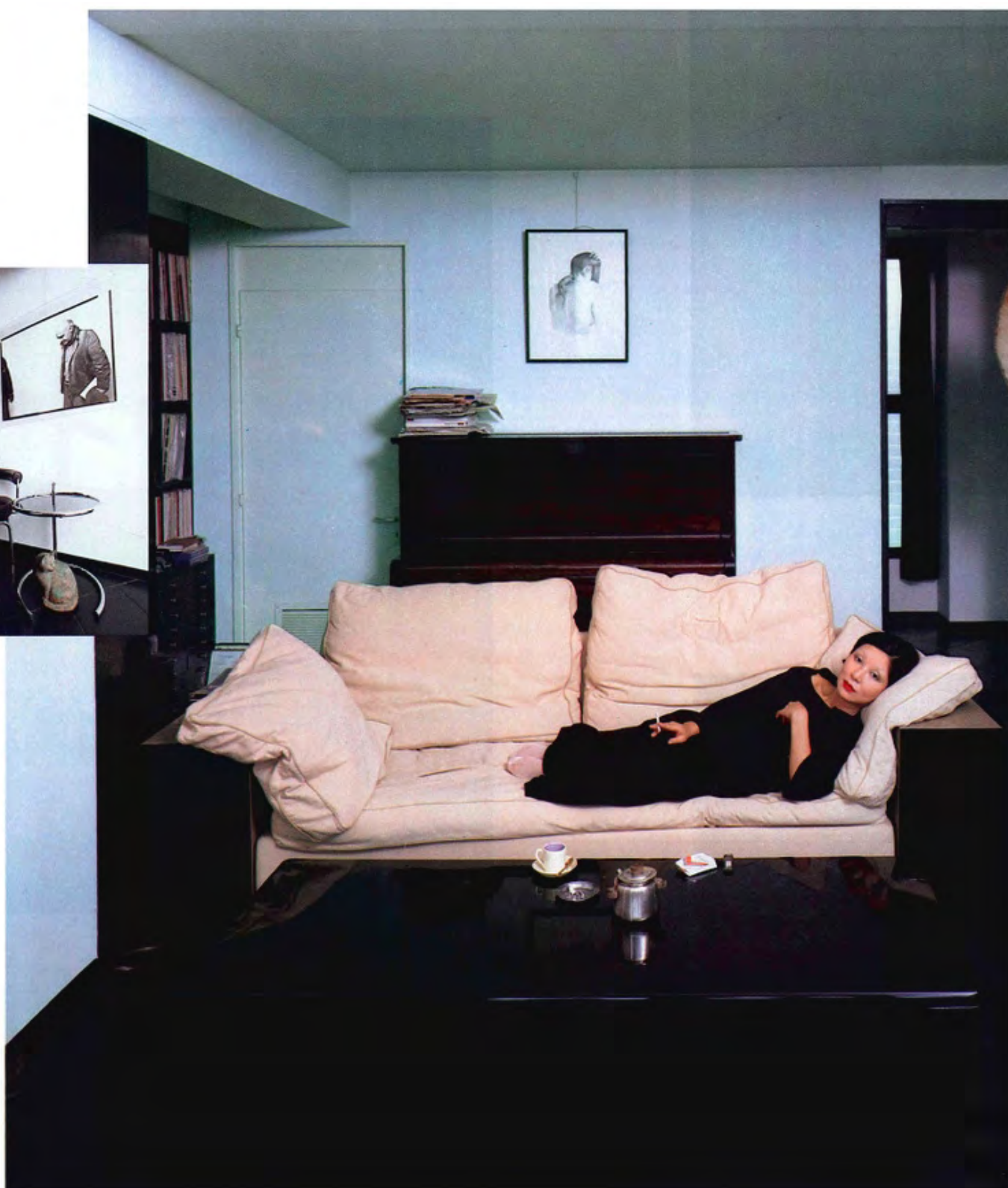
F・M「薩さんの歌も、そうですね。少しも私は日本人とか感じさせないし、また、無理にフランス人らしくも歌っていない。本当にプレバールやトポールに共感して、それを表現している。薩さんと話していると日本とか、フランスにこだわっている時代はもう終わりという気がしますね。勿論、国民性の違いとか、自分の文化のルーツとしての民族の違いはありますけど。」

M・S「そう、同じ日本の中でも、やっぱり私は札幌という土地で生まれ育ったってことは否定できませんし……。」

F・M「私は前に雪祭りの時、札幌モードのファッションショーの審査員で札幌に行ったのですが、丁度その時、私の母が来ていて、娘も連れて、母子三代で雪祭りを見ました。空港から市内までの道が、パリの空



玄関を入ったホールの右側、奥に掛かっている写真はすべてモノクロ。



個性的な 美意識が創る部屋

薩めぐみ
シンセサイザー歌手

必要最小限のものがあれば、それでいい。
手放したくないものなど何もない。





2階のベランダには白い軽やかな椅子と巨大な布の parasol。



玄関にかわいい靴と帽子。藤さんはご主人と1歳8カ月のお嬢さんと暮らす。



フォルムの美しい椅子とテーブルは、ル・コルビジエのデザイン。モダンですっきりしたダイニング・ルーム。

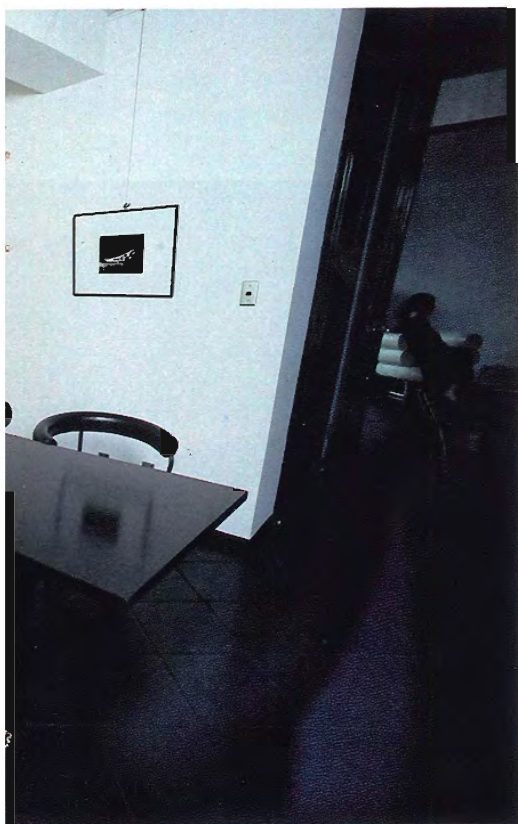


特注品の黒い書棚には和洋取り混ぜてさまざまな種類の本が並んでいる。



リビングの真上に当たる2階の寝室。右端にはスピーカーが並ぶ。奥に見えるのは書斎。

たものには魅力を感じないから。
家具を探し歩いたり家の模様替えを
したりすることはない。そんなに欲し
いと思ふものはないから、何かを見て
気に入ったら、仕方ないと思って買う。
そうして選ばれた家具たちは、ミス
テリナスな雰囲気と漂わせる藤さんに
よくなじむものばかり。
「他人にどう思われようとかまわない。
自分自身に忠実に自然に流れていく」
という藤さんの生き方がインテリアに
も反映しているのだろう。
照明はリビングにもダイニングにも
一隅にほのかにあるだけ。
「ごはん食べたりお話ししたりするた
めには十分な明るさでしょう」。
食器や小物にも特に凝るわけではな
く「気にさわるなければ構わない」。
既成の価値基準に頼らない人だけに
許される、ぜいたくな住み方だ。



円柱のある広いバスルーム。白と黒のタイルの構成が表れている。トイレは家中に3カ所ある。



リビングのスピーカー。木の色がモノトーンの部屋に映える。

黒い床、白い壁、黒いカーテン。家具のほとんどは黒と白。女主人は黒いスウェードに身を包んでいる……。

「黒も白も色」じゃない色だから好き。

世の中には色が溢れているのでしよう。せめて家の中はすっきりさせたいの」

リビングに置かれたソファも椅子も20年代風。20年代のデザインのもの。とアール・デコのなかでも、よりシンプルなスタイルが気に入っている。この家を3年前に建てたときの希望は「むだな空間をできるだけなくさん」。

物欲もなければ、ものに対する執着もない。従って、手放したくないものなどひとつもない。お金で売買できるものに、それほど大切なものはないから。ものを管理するのも面倒だし。

「油絵のように資産価値の代表みたいなものは飾りたくありません。写真や版画のように複製のあるものなら壁に掛けてもいいけれど」

花を飾ることも滅多にない。

「バラとかチューリップ、カーネーションなどの価値がきまりきった花は嫌いです。雑草のほうがましなくらい」

時には気に入った花を置くが、観葉植物は絶対にだめ。イメージの決定し

’30年代のパリに生きた
コクトー、フレヴェール、そしてブレヒトに捧ぐ。

CHANT DES CANNONS
COMPLAINT DE MACKIE
LA FIANCÉE DU PIRATE
LA CHANSON DE BILBAO
CHASSE À L'ENFANT
LA GRASSE MATINÉE
LE JEU DE MASSACRE
ANNA LA BONNE
LES BOULES DE NEIGE
SURABAYA JOHNNY
LE CHANT DE BARBARA
BALLADE DE LA VIE AGRÉABLE
LES SOUTIERS
MONTE CARLO

薩めぐみ シャンソン・リサイタル

4月28日⑩午後7時 29日⑨午後5時

ピアノ伴奏＝クロード・ローラン

演出＝J・B・モラー 照明＝J・ポップ 美術＝J・アンリ

料金＝2,000円(全席指定)

前売り＝西武劇場前売所(渋谷パルコ1F) 都内各プレイガイド

電話予約＝464-5111(内線60)

お問い合わせ＝西武劇場 464-5100～1 ハッピージョーク 476-0227

西武劇場 渋谷パルコ9F

久しぶりの大型新人歌手

サッ

薩 めぐみ さん

◆日本人にはまれな声質

平凡な顔である。私立大学のキヤンパスで、本やノートをかかえて歩いている地方出身の女子学生によくあるタイプ。それに、失礼ながら、あまり男子学生にいいよられそうなオイロケもない。あかねけているとも申せない。

ところが、この人「日本人にはまれな、独特ないい声質の持ち主」(石井音楽事務所・石井好子さん)であるらしい。

見てくれはそこいらへんの娘さんと変わらないが、才能の点でチヨイと違うのである。

このほど、東京・日比谷公会堂で行なわれた第五回シャンソンコンクールで「愛の生命」を歌って、みごと優勝。シャンソン界では「岸洋子以上の大物新人」と、ささやかれている。

「親としては、女子大へいくなら東京へ出てほしいといったのですが、あの子ったら、ないしょで早稲田を受けてしまったんですよ」と母親の千枝子さん(四七)はこぼす。

早稲田大学にはいった薩は、早稲田でなければできないことをしようと考えた。その結論が、大隈講堂でリサイタルを開くこと。声が低いので、シャンソンを選び、さっそく「早大シャンソン研究会」にはいった。と同時に、大学一年

の秋、作曲家・宇井あきら氏の門をたいた。一年後の早稲田祭で、薩は念願の大隈講堂でエミール・ステルン(仏・ピアノスト)の伴奏でシャンソンを歌った。このとき、ステルンは「彼女はプロになれる」とタイコ判を押したという。それが励みになった。

◆欲ばった人生を送りたい

彼女は毎日一、二時間練習しただけという。が、友人の歌手・松井広子さん(三三)は、

「テープレコーダーを三台置いて、夜中から明け方の五時ごろまで練習したこともある」という。

歩き方、目のくばり方、手のあげ方まで勉強した。

優勝するのもむべなるかなであろう。いまや、彼女は「星の数よりたくさんいる男の一人によりも、歌に人生をささげたい」とおっしゃるのである。薩は、学友たちに「バット見スゴハレ、中身スゴマジメ」といわれている。

「はじめて会ったとき、髪は茶色に染めてるし、化粧は濃い。遊び人に見えました。でも、ほんとにものすごくマジメなんですネ」とは「早大シャンソン研究会」の岩間南平君(法学部二年)。

バツと見たところでは、すごくハレンチだ、こういう意味なのである。

シンはしっかりしているのだ。大学での専門は「投資論」。

「はじめはデザイナーになりたかった。でも店を持ったら、洋裁学校の技術だけじゃダメだと思った」つまり、経営者の才覚も身につけようと思って、商学部を選んだ。そして「投資論」といっても、とくに「株式」のことに興味があるという。

こうした点、計算はなかなか着実。しかし、かわいげのない女、という感じではない。皮肉ではなく、底のぬけた茶わんに水を満たそうとするような「ぬけた女」のよささえ感じさせる。

「でも、私は情に流されるのはイヤ。女性の魅力と男性の能力を両方もちたいと思ってます」そういう欲ばった人生を、彼女は送りたいのである。

◆神経はかなりのダイコン

ステージでの写真を撮影するため、Nミュージックサロンにいった。耳をロウするグループサウンズ。そのオトのなかで、薩はまどろんでいた。神経が足の太さ(かなりのダイコン)くらいあるらしい。「ステージで伴奏を間違えても、あの人は平気。落ち着きはらって歌をつづけてます。かなりの心臓ですわねえ」(岩間南平君)。「コンクールの決勝戦の前に髪を

〈略歴〉昭和二十三年二月、北海道札幌市生まれ。四十一年、札幌市藤女子高校卒業。同年四月、早稲田大学商学部入学。現在三年生。父親の一夫さん(五七)は、札幌百点KKの社長で「財界札幌」「月刊札幌」などを出版している。姉の一枝さん(三三)と二人姉妹。

セットしてあげたんです。私は手がふるえてアピンも持てなかったのに、彼女はその間に発声練習をしたり、クツ下はきかえたり……。度胸満点」(松井広子さん)

他人の思惑はぜんぜん気にしない性質なのかもしれないが、母親の千枝子さんは「若いくせに古風なところがあるんですよ」という。

そして、薩自身は一、「結婚したら、夫の浮気に耐え忍ぶほうです。でも……歌うのを許してくれる寛容な男性っているかしら。男は勝手だから……」心配ご無用。大きなお世話だろうが、古いコトワザに「タデ食う虫も好き好き」というのがあるではないか。

「カラーデータ」マミヤプレススーパ123、セコール100、紋りF1、60分の1秒

〈左ラビアン〉才能と環境に恵まれた学生歌手。男性よりも歌に人生をささげたいというのだが……。 (早稲田大学・大隈庭園で)



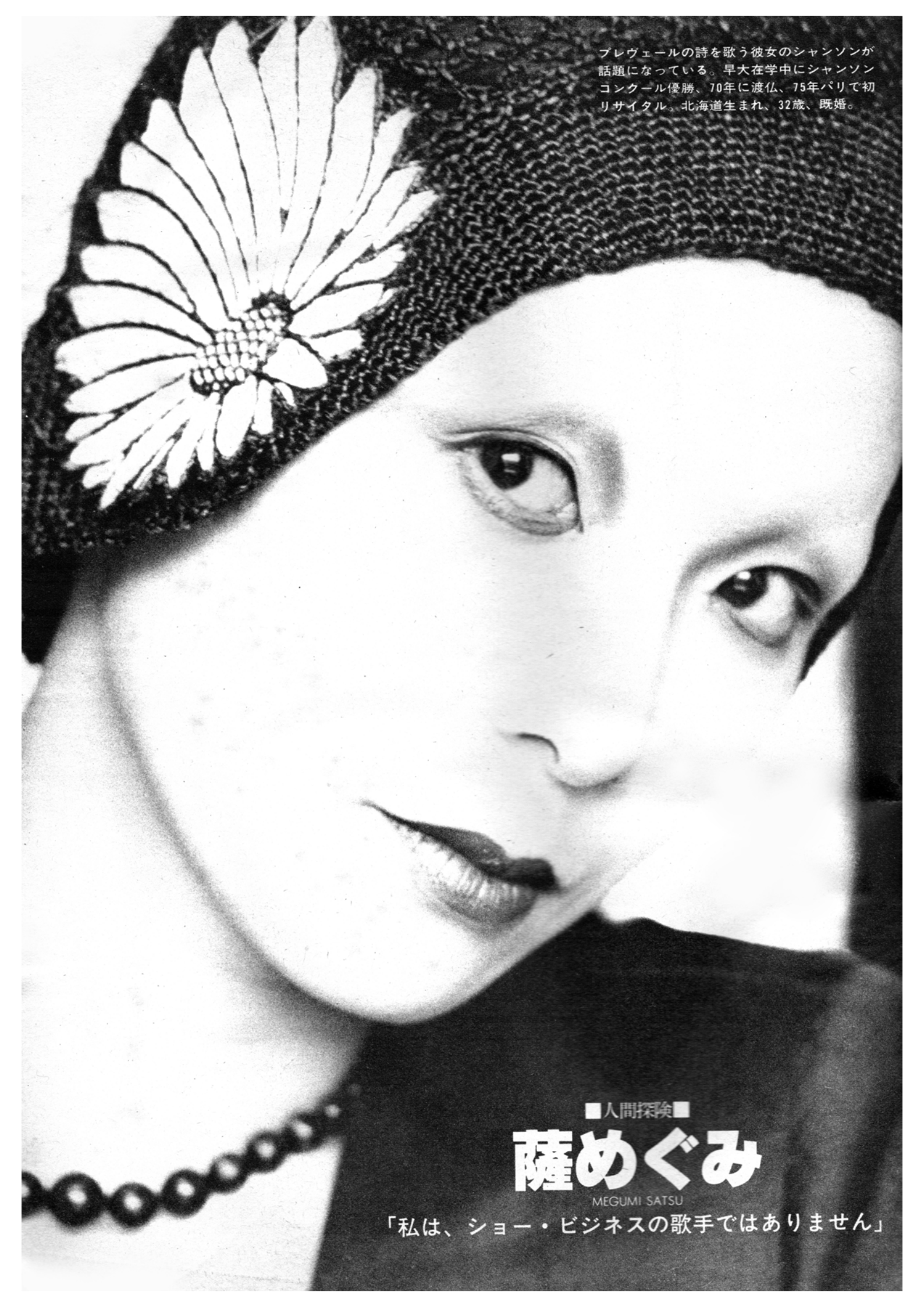


歌の大先輩、石井好子さんにアドバイスを受ける（東京・高輪の石井さん宅で）

ステージに立てば、グッと女らしくなる（東京・銀座のNミュージックサロンで）

撮影・房木 芳雄



A black and white close-up portrait of a woman, Megumi Satsu. She is wearing a dark, textured knit hat with a large, light-colored daisy flower pinned to the side. She has a slight smile and is looking towards the camera. A dark beaded necklace is visible at the bottom of the frame.

プレヴェールを歌う彼女のシャンソンが
話題になっている。早大在学中にシャンソン
コンクール優勝、70年に渡仏、75年パリで初
リサイタル。北海道生まれ、32歳、既婚。

■人間探偵■

薩めぐみ

MEGUMI SATSU

「私は、ショー・ビジネスの歌手ではありません」



『評伝』「私のスティージには、ビジュアルな評論も入っているでしょう。これは私がフランク・アズで初めてやったこと。真似もできています」



（東京）自宅の書斎には洋書がいっぱい。ちなみに彼女のレコードは現地製作の輸入扱い。（パイプパイパーハウスが扱っている）



（メンバー）「ショー・ビジネスとして歌う気はさらさらない。文化的、芸術的な行為なので」と語るだけにメンバーを大切にします。

「シヤンソンの新系譜？」

「佐佐十一年、本郷へて歌う彼女
がシヤンソンの新しう翻譯書、
と讀みられる。これは大變な事と
なのだらう。」

「私がアリスに借りたのは、い
ろいろな偶然の関り合ひ。日本流
にアリスに貸されてはいないシヤン
ソンの歌うたつたのも「因だけと、
まあ、運命かな」

「ベリーのキャンピーで「か月契約
の仕事から始めた。下宿な」

「三年経つてみると、周囲に
は結構生活の安定して三人がゐる
わけね。でも、私はべんを決定が
嫌いなもので、自分なりのリサイ
タルを續けていた。それと、う
ちのね」

「あ、お嬢様が来てくれて結構した
シヤンソンのと、うやうやの「應に
なるほど。」

「文・香月正光



《母》息ぬきは札幌の実家に帰つての母、千枝子さん(57)との語らい。コンサートが話題になったが、立見客のする千五百人の盛況。

商学部で習った「ヤニソン」

薩^{さつ}

めぐみ

「歌で身を立てようなんて大学に入る時は考えてもみなかったのに……」早稲田大学商学部三年の薩めぐみさん。第五回「シャンソン・コンクール」で、百五十名の中から一位に選ばれた。学生シャンソン歌手第一号だった東大生の加藤登紀子と同じケース。卒業後は「学生生活の間の肩書をつけたプロ歌手になるわけ。」「ほんとうは私、学生生活の間、にしかやれないことをやろうと思つて、大隈講堂で歌うこと」を考え、ついでに「習い始めたそう。」「宇井あきら氏に聞いたのが一年半前。素人っぽい歌のボロがこのところ出なくなつた感じ。低い太めの声はシャンソンに向いているから、あとは勉強次第」と同氏。商学部での専攻は「投資論」とか。投資の方向もイロイロとあるものですね。



カメラ・本誌 松崎国史

驚くほどの
「ヤニ」をとる

〈たばこのヤニ〉
有害タールの約80% 以上をとりのぞきます



トレンドホルダー

PAT. No. 800395 PAT. P. No. 42, 44126



〈携帯用ケース付〉
定価＝500円
〈姉妹品〉定価＝300円
たばこ店・薬局・デパート
喫煙具店にて発売中
東京都江戸川区奥宮町43
テラサキ株式会社

さつ 薩 めぐみ

愚問賢答の一例。

— 女の子なのに なぜ商学部に入ったの？
「小さいときからデザイナーになりたかったんです。デザイナーになるならデザインスクールか洋裁学校に行くのがふつうだけど 私はまずお店を経営することを考えて商学部を選んだんです」

— 歌をうたいはじめた動機は？

「早稲田に入ったからにはなにか早稲田でなくてはできないことをやりたかったの。早稲田の象徴といえば大隈講堂でしょ。その大隈講堂でなにかやりたいなあと思って考えたのがリサイタル。でもそのリサイタル

ルをやるためには歌がうたえなければダメだから……」

— なぜシャンソンを？

「声が低かったからね」

この話からもわかるように早稲田大学商学部三年生 二十歳である。さきほど日比谷公会堂で行なわれた第五回日本シャンソン・コンクールに参加 エンリコ・マシアスの曲「愛の生命」をうたって優勝した。このコンクールは年々盛んになり レベルも高くなって ことしは百五十人の参加者がたという。

● 第二回の優勝者・加藤登紀子 第三回の

優勝者・堀内美紀。こういった名前はもう

かなり一般にも知られている。シャンソン歌手の登竜門の一つを突破した彼女もこれらの先輩につづいて石井音楽事務所に所属し プロ歌手としての道を進むことになる。

お父さんは札幌で雑誌を出しているそうだ。シャンソンは宇井あきら氏にレッスンを受けているが 本格的にプロをめざすようになったのは大学二年のとき フランスのピアノリスト エミール・ステルンに励まされたのがきっかけ。

● シャンソン歌手 さわしい顔立ちをしている。いや ふさわしいといういい方は



シャンソン歌手の
イメージに近い顔立ち
だが彼女は
遊ぶことは嫌い一人でいたい

おかしい。シャンソン歌手について一般が抱いているイメージに近いといったほうがいいかもしれない。つまり おとなの愛の歌をうたつてもよく似合うといったところ。ところが本人は「遊ぶことはあまり好きじゃないの。レコードをきいたり 自分で洋服をつくったりして一人でいるのが好き」だという。

学校とシャンソンの関連についても「人前で歌うことは学業の妨げにならない程度にやりたい」と これも きわめて堅実な答えがかえってきた。

(K)

第4回 薩めぐみ／春の大舞踏会

2016.06.22

プレヴェールが1977年4月に亡くなってから何年か。池袋の西武美術館のあるフロアの一角で、その詩が歌われていた。よく知られたスタンダードなシャンソンではない。フランス語を理解できたとしてもどれだけの人がこの詩人のテキストだとわかったかどうか、わからない。21世紀になってもかわらず「プレヴェールのうた」として本やCDとしてリリースされるもの、スタンダードなシャンソンとして親しまれているプレヴェールとはあきらかに異なったものだった。

女性の声は低い。歌いあげるといふよりは、朗読がそのままメロディに変容したかのよう。ときにはささやきやため息さえもまじっているかのようで。かといって、朗誦 *récitation* ではけっしてない。うた、である。そして楽器は、いや、エレクトリック・ピアノやシンセサイザーのサウンドは、声に寄り添っているのではなく、声とともにこそあった。

Et ce qu'il voit est si beau / et ce qu'il sait est si vrai / que bien peu peuvent le voir / que bien peu peuvent le savoir / et que beaucoup l'ont oublié (そしてかれがみるものはあまりに美しく／かれが知るものはあまりにほんとうだったから／ごくごくわずかの人だけがみることができ／ごくごくわずかの人だけがしることができ／多くの人は忘れてしまっていた)

Jacques Prévert chanté par Megumi Satsu は1979年にリリースされたLPで、いまは渋谷文化村や初台オペラシティにあるNadiffの前身、ART VIVANTが輸入・販売をしていた。お店の人はこっそりと、でも、うれしそうに話してくれたものだ。このアルバムはこここのART VIVANTという店に揃えてある音楽—からできているんだよ。ブライアン・イーノやジャーマン・ロック、ミニマル・ミュージックというようなね。

ヌーヴェル・ヴァーグの映画作家たちがプレヴェール／カルネの古き良きフランス映画にうんざりしていたのと近いのかもしれないが、ところどころで耳にはいつてくるシャンソンはいいとして、いわゆる「シャンソン」にじっくりとつきあってこなかったわたしは、このアルバムだけはくりかえしくりかえし聴いた。そして、ここで用いられているプレヴェールの詩がはいっている『春の大舞踏会／ロンドンの魅惑』を、『パロール』よりもずっと愛読した。

『春の大舞踏会／ロンドンの魅惑』は、イジスの写真とともに1951年につくられた、もとはべつべつの詩／写真集。詩のみは2冊まとめてFolio版で読めるのだが、長らく、写真集をみるとは叶わなかったし、それほど写真に執着してもいなかった。何よりも薩めぐみのアルバムがパリとロンドンの街を、第二次世界大戦が終わってそれほど経っていない時期の街をそのままとらえていたから。それに「現代詩手帖」では詩人が亡くなったとき、特集を組み、そこには窪田般彌訳でいくつか読むことが、またイジスの写真を見ることができた。いまのように、ほしいとおもってもすぐに手にとれる時代でもなかった。

先に引いた詩は、アルバムの冒頭に収められた楽曲の最初のストローフだが、つづくストローフも引いてみよう。こんなふうだ—Et la vitre n'est même pas fêlée / elle est simplement brisée (窓ガラスはひび割れてなんかいなかった／ただ割れていた)

これはどういうことなのか、ずっとわからなかった。わからないままだった。ことばとしてはわかって、だ。それが、イジスとの詩と写真のコラボレーションを2008年にあらたな私たちで

出版されたものをみて、そうなのか！と何十年来の疑問が解けたのである。いやそれこそ、ただ（simplement）、窓ガラスのところにいる子どもが写真に映っているのだ。

いや、詩は写真を解説したり、逆に写真が詩を解説したりするわけではない。文字は文字で、詩として独立して読むことはいくらでもできるし、そこで想像がはたらくのが詩だ。それでいて、こうしてならべられていることで、腑に落ちることもある。ましてやプレヴェール、映画とつながりがつよかった人物ではなかったか。あらためて、テキストとヴィジュアルが結びついた作品においては、もともとのかたちを尊重すべきと納得したのであった。

もうひとつある。建物のはしに鳥かごを窓の外に引っ掛けている写真があって、この詩はうたにはなっていない。だが、鳥かごのさまは、ほかでもない、前回とりあげたアニメーション『王と鳥』のいくつかのシーンを想いおこさずにはいないのだ。時期的にも重なっているので、実証はできないけれど、きっとプレヴェールもそのことをおもっていたらうなどと想像するのは楽しい。この写真とならんでいる詩にはMon petit charbonnier（愛すべき炭焼き屋さん）と、ta femme（あなたのつれあい）と呼びかけさえあるのだから、アニメーションの煙突掃除夫とつながってもおかしくはない。

イジス、本名イジス・ビデルマナス（1911-1980）はユダヤ系リトアニア人。1930年にパリにやってきたが、この地でもナチスの拷問を受け、レジスタンスに助けだされて、戦後、人びとの姿を写真に撮るようになった。

薩めぐみは札幌に生まれ東京での学生生活を経て、1970年に渡仏、以来、亡くなるまで2010年までパリに暮した。その最初のアルバムがこのプレヴェール。いまはもう知る人はすくないのかもしれないが、プレヴェールとうたといったら、わたしにはこの声が、このサウンドが欠かせない。

◇初出＝『ふらんす』2016年7月号

シャンソン愛

峰艶二郎(みね えんじろう)による、シャンソンについて綴るブログです。

htmt-mth@ezweb.ne.jp

[2021-06-17](#)

薩めぐみ

シャンソンという鎧ー薩めぐみ I

フランスのシャンソン歌手の経歴を見ると、移民が多いことに気づく。アズナブール、ブレル、ダリダ、ムスタキ、アダモなど、よく知られる歌手たちはフランス出身者ではないのだ。「フランスは旅行者には天国、移民には地獄」という黒いことわざがあるが、彼らがいかにしてシャンソンを武器にして地獄を生き抜いたか、ということに関心をもった。

日本からフランスに渡った歌手はいないだろうか。そんなことを考えて、ふと頭をよぎったのは薩めぐみ(さつめぐみ)という人のことである。

薩めぐみは、1948年に札幌で生まれた。父親は札幌の情報誌「財界さっぽろ」の編集長である。早稲田進学中、68年に第五回日本アマチュアシャンソンコンクールで大賞を獲る。その後、石井好子音楽事務所の専属歌手になるも、日本でシャンソン歌手と称して活動することに疑問を感じ、70年にパリに渡る。

79年、フランスの詩人ジャック・プレヴェールの詩を歌ったレコードを出したことが、日本とフランスで話題になる。その後はフランスで歌手活動し、2010年に62歳で死去した。

薩の映像はYouTubeに多数あるが、眉を剃り落とし、1920、30年代のアンティークのドレスに身をつつんだ独特のファッション、その一方で歌う曲はテクノである。初見で、このアンバランスさを受け入れるシャンソン愛好家は正直少ないだろう。

しかし、彼女のファッションがフランスのアールデコ期のもの、言い換えれば日本のシャンソン愛好家がイメージするフランスのファッションであり、他方で自身のレパートリーをフランスはじめ世界で流行していたテクノで歌っていたことは、彼女が日本の移民としてフランスのシャンソン界で生き抜くための武装だったと気づく。

では、彼女はいかにして自身の歌手活動を通じてその鎧を獲得したのか。本稿では、彼女の初期アルバム3枚を取り上げて、数回にわたり論じていく。

薩が日本からパリに渡り、自身のレパートリーを模索するなかで発見したのは、1920、30年代に流行した文学の詩人の作品に曲をつけた「文学的シャンソン」と呼ばれるジャンルだった。石井好子音楽事務所のツテで、現地のクラブ歌手になり歌手活動をするが、やがて専属歌手を辞めてリサイタルのみで活動するようになる。そのリサイタルでは、作詞ジャック・プレヴェールと作

曲ジョセフ・コスマの楽曲や、[ベルトルト・ブレヒト](#)の戯曲に[クルド・ヴァイル](#)が曲をつけたドイツの音楽劇「[三文オペラ](#)」の挿入歌(これらは当時フランスの歌手の多くがカバーした)などを中心に構成し、日本人が古きよき「文学的[シャンソン](#)」を歌っているということで、徐々に知られるようになる。

その一方で、彼女はパリの男性と結婚し出産もしている。その時期は活動を休止していたようだ。

当時の薩を知ることができる映像が[YouTube](#)にある。

1975年、日本のテレビ番組で映画「[砂の器](#)」の主題曲「宿命」で知られるピアニストの菅野光亮と対談する映像だ。

菅野と対談しながら、彼女は自身のコレクションである20、30年代のファッション誌や骨董品を手にとって紹介している。この頃から、後のアン*ティーク*のファッションに身をつつむスタイルの萌芽が見られる。

また番組では歌声も披露する。フランスの詩人[ポール・フォール](#)の詩に曲をつけた「雪玉」、「空と海と太陽と」という[シャンソン](#)で知られるフランソワ・ドゥゲルトの曲「[さくらん](#)ぼ実る頃を歌って」(のちにドゥゲルトは彼女に「風、ノルマンディー」という曲を提供し、それが日本のドラマ「[天皇の料理番](#)」の主題歌になる)、日本の詩人・[西脇順三郎](#)の詩に菅野が曲をつけた「冬の朝」だ。

このレパートリーを見ても、彼女が「文学的な[シャンソン](#)」を通じて、自身の歌手としてのスタイルを確率しようとしているのが伺い知れるだろう。

そんな彼女の運命は、79年に大きく花開くこととなる。

(続きます)

[シャンソンという鎧一薩めぐみ](#) II

日本からフランスに渡り、1920、30年代の「文学的[シャンソン](#)」を歌った薩めぐみは、徐々に現地で知られるようになった。1975、6年頃には、彼女のリサイタルがテレビで放送されるようになる。

そのとき彼女が歌う[シャンソン](#)の名曲「枯葉」を、テレビの前で息を飲んで観る男がいた。「枯葉」の作詞者であり、フランスの詩人、[ジャック・プレヴェール](#)である。

プレヴェールは、「こんなにも私の詞を理解し、肉薄した表現をした歌手はいない」と感嘆し、彼女のために自身の詩を提供する準備をする。「枯葉」は世界中でヒットし沢山の歌手に歌い継がれた[シャンソン](#)だが、フランスの詩聖の評価を得たのが20代の日本人女性であったことは、とてつもない名誉であろう。しかし、プレヴェールは薩を探しだすことができず、77年に死去してしまう。遺言を引き継いだプレヴェールの未亡人が、薩と出会うのは彼の死後8カ月経ってからであった。

薩は、プレヴェールの遺言を受けて彼の詩に曲をつけてレコードに吹き込んだ。それが、1979年発売の『JACQUES PREVERT』である。

数人の男性作曲家によって曲がつけられたが、その曲調は全体的にアコースティックで、多くのプレヴェールの詩に曲をつけたジョセフ・コスマのものとは差違をつけ、かつ文学詩の雰囲気壊さぬように配慮されている印象を受けた。

プレヴェール未亡人は遺言にしたがい、薩に彼の詩を渡すが、日本の音楽誌等の資料を読むとその内容が錯綜している。プレヴェールが薩のために書いた詩を渡した、未発表の詩を歌う許可を与えた、等の様々なエピソードが語られているのだ。

しかし、『JACQUES PREVERT』の収録曲を見る限り、プレヴェールが薩に自身の詩を使用する許可を与えた、と解釈するのが妥当だろう。なぜなら、このレコードのすべての収録曲が、1951年刊行のプレヴェールと写真家イジス・ビデルマナスによる写真詩集『春の大舞踏会』に収めら

れた詩であるからだ(一曲のみプレヴェールの代表作「朝食」を日本語で歌った曲が収録されている。作曲はジョセフ・コスマ)。

『春の大舞踏会』は、パリの街の風景を撮ったビデルマナスの写真にプレヴェールが詩を寄せたものだ。薩のレコード発売にあわせて刊行された『[現代詩手帖](#) プレヴェール特集』(79年3月)では、レコードに収録された詩の日本語訳と、『春の大舞踏会』に掲載された写真を見ることができる。

薩は『春の大舞踏会』のなかから、自身の気に入った詩を選びレコードに吹き込んだ。もともと『春の大舞踏会』に収められた詩には、写真に寄せたものゆえタイトルがつけられていない。なので、レコードでは曲目として、それぞれの詩の冒頭一行目、二行目を便宜上のタイトルとしている。

薩が選んだプレヴェールの詩を見ると、ふたつに分類される。ひとつはプレヴェールお得意の「童話」のような詩である。子供の夢のような世界を詩で綴り、想像力の自由を訴えている。もうひとつは、「戦争と無関心」である。第二次大戦で[ナチス](#)に支配されたフランスだが、それを忘れて無関心でいると、その悲劇は繰り返されるだろうということが綴られている。もちろん、プレヴェールはこうしたメッセージを直接訴えてはいない。ビデルマナスの写真に写された何気ない街の風景からイメージを働かせて詩に綴り、さらに読者に想像させるようなしくみになっている。

例えば、レコードの1曲目「彼の見るものはとても美しく」は、ビデルマナスがガラスに顔を押し付ける少年を撮った写真に寄せられた詩である。長いので、内容は画像を参照してほしい。この詩を私なりに次のように解釈した。

戦争によって廃墟になった街
人々が戦争に無関心であるかぎり、
たとえ戦争が終わっても、砕けた窓ガラスは地面に散乱したままだ。
ガラスのない窓からは、
美しく風景が見え、自由の風が吹き込んでくる。
だが、戦火に街を焼かれたときの
キナ臭さが消えることはない。
新しく生まれてくる子供たちは、鼻を押し潰されているので、
それを嗅ぎとることはできない。

詩は、読み手に多くの想像力を与えるものだ。薩は、こうした解釈を聴き手に与えるような詩を選び、楽曲として発表したのである。

このアルバムは、フランスと日本で衝撃をもって迎えられる。薩のレコードは両国で話題になり、フランスではメディアで取り上げられ、日本では札幌と東京でリサイタルが開かれた。こうして、薩は一流歌手の道を進んでいくこととなる。

[ヤンソン](#)という鎧―薩めぐみ III

1979年に[ジャック・プレヴェール](#)の詩をレコードに吹き込んだ薩めぐみは、日本とフランスで衝撃をもって迎えられた。彼女は、このアルバムを引っ提げて両国でリサイタルを開くが、そのときの衣裳はパリの蚤の市で手に入れた[20年代](#)のシャネルのスーツに、アンティークのспанコールとビーズの飾りをつけたという。
アンティークの衣裳に身を包んで歌うスタイルは、このとき完成したと言ってよい。

プレヴェールの詩の使用を認められた彼女だが、二度と彼の作品で新しい楽曲を発表することはなかった。レコード発売の翌年、彼女の前に新しい詩の世界が拓かれていたからである。

1980年、[イラストレーター](#)で劇作家の[ローラン・トポール](#)が彼女に幾篇かの詩を捧げた。トポールは、1938年生まれの[ポーランド系ユダヤ](#)人。[第二次世界大戦](#)中は、[ナチス](#)ドイツから迫害を受け、戦後はイラスト、劇作、小説などで才能を発揮した。97年に死去している。トポールのイラストは、「ブラックユーモア」と称されている。確かに、作品を見ると暴力性や[サディズム](#)、[マゾヒズム](#)、エロティシズムに富んでいる。しかし、幼少期の彼が[ナチス](#)に迫害されたことを思えば、[サブカルチャー](#)や戯画で片付けることはできないだろう。

薩は、トポールの詩に曲をつけた楽曲で構成したリサイタルを[ジェラルド・フィリップ](#)劇場で3ヶ月上演した。そしてその楽曲を、セカンドアルバム『Je M'[aime](#)(私は私を愛する)』に収録する。

トポールは、薩にどのようなテーマの詩を捧げたのか。日本でトポールの風刺漫画本『マゾヒストたち』を翻訳したフランス文学者、[澁澤龍彦](#)の言葉を使うなら、「資本主義的幸福を否定した快楽主義」である。快楽主義、つまりは自身の本能によって快楽と自由を得ることである。

それがどのように詩に表されているのかを、アルバムに収録された詩を断片的に見ながら解いていきたい。

「Monte dans mon ambulance(私の救急車に乗らない?)」

サイレンの音にぞくぞくしながら
担架にゆっくり寝そべて
[ブルゴーニュ](#)の赤を一杯
ヴァカンスにはこれが一番
居心地満点 私の救急車

「[Noir](#) et blanc(黒と白)」

モンパルナスタワーの私のアパルトマンを
すっかり白く塗らせたの(中略)
でも黒いところはちゃんと残るの
足の付け根の真ん中に

「Credit Requiem(クレジットレクイエム)」

[アメリカ](#)ンエクスプレス
あんたは私をほしくないのね(中略)
いずれあんたのカードも火あぶり
死んだカードをふところに
みんな自由な旅に出るのさ

まず「私の救急車に乗らない？」だが、フランスでは救急車は有料だ。それに乗ってヴァカンスに行くという皮肉が込められている。

「黒と白」では、当時フランスで唯一の高層ビル、モンパルナスタワーの黒い外観を白く塗りつぶすことができる財力のある女が登場する。しかし、その陰部は黒々としているというユーモアが効いている。

「クレジットレクイエム」では、資本主義の象徴であるクレジットカードを手放して自由を得ようと訴えている。

このように、トポールは資本主義の幸福を満喫する人々を皮肉っている。では、いかにして「快樂主義」を獲得すればよいのか。それは、アルバムのタイトルにもなった詩「Je m'[aime](#)」に記されている。

「私は私を愛する」
私は禁じられた部屋を持っている(中略)
夜が来るとわたしはそこを訪れる
たったひとりで
わたしのなかに潜む欲望と共に(中略)
わたしが愛するのはわたし
愛せるのはわたしだけ

トポールは、自分の内に秘めた欲望と向き合い、それを本能的にいつくしむことで、金では買えない本当の幸福を得ることができる、と説いているのだ。言い換えれば、自分の幸福は資本主義という制度に規定されるべきでないという、彼の主張を知ることができる。

トポールの詩を読むと、救急車でバカンスに行ったり、ビルを塗りつぶしたりなど、ユーモア溢れる世界観である。しかし、そのユーモアのなかに強いメッセージ性が込められているのだ。これは、前回のプレヴェールの詩と同じであろう。

トポールが、[シャンソン](#)のために詩を書き下ろすことは異例であり、これもまた薩の人気を上げることに繋がった。日本では、1982年刊行の「[ユリイカ](#) [シャンソン](#)特集」で、芳賀詔八郎が「[ローラン・トポールのシャンソン](#)」という題で、薩のアルバムを紹介している。

なお、このアルバムの曲調は、全体的にクラシックにロックを融合した[プログレシブ・ロック](#)のような印象を受けた。前作の落ち着いた曲調とは大きく異なる。
またアルバムにはトポール以外にも、演出家のジャン・ベルナード・モラリーや、俳優のダニエル・ジェゴーも詩を寄せている。

シャンソンという鎧一薩めぐみ IV

薩めぐみは、[ジャック・プレヴェール](#)の詩で「戦争と無関心」、[ローラン・トポール](#)の詩で「資本主義的幸福の否定と快樂主義」を歌った。

そして彼女は、1984年にサードアルバム『則天去私』(フランス語によるタイトルなし)を発表するが、製作中に「薩自身による詞に曲をつけてみては？」という提案を受ける。そして、彼女は4曲の歌詞を書き下ろす。

それらを紹介する前に、アルバムの全体的な内容を説明したい。
収録曲は全8曲で、薩の歌詞以外のものは、前作のトポール作詞「私の救急車に乗らない?」「私は私を愛する」の新録音が入っている。

また新曲としては、[社会学者のジャン・ボードリヤール](#)が薩に捧げた詩「自殺モートル(Motel suicide)」、文豪ヴィクトリ・[ユーゴー](#)の詩に曲をつけた「[諸行無常](#)(A ma fille 私の娘、の意)」がある。

[ボードリヤール](#)は、それを身につけると「自分らしさ」を得ることができる商品に大金を払うのが現代の消費社会である、と説いた学者だ(大雑把に説明すれば)。「自殺モートル」では、自殺という自己決定を、商品として扱うモートルが登場する。たとえ自殺を思い止まっても、前払い制なので取り返しがつかないという、「自分らしさ」すら商品として買ってしまう消費社会への皮肉を歌う。

「[諸行無常](#)」は、「ひとにはそれぞれ運命がある。みんな幸せになろうとするけど、運命が邪魔をする。でも、そのちっぽけな幸せこそ、人々が本当に欲しいもの」という内容の詩で、生きることの倦怠と希望を歌っている。

では、薩が書き下ろした歌詞について取り上げていきたい。彼女が自身の詩で歌ったのは、「日本人移民である自分が、異端者としてフランスで生きる覚悟」であった。薩の詩を抜粋して見ていきたい。

「わたしも人の子(Comme tout le monde みんなのように、の意)」
わたしも人の子 みんなと同じ
死体の肉を食べないときは
朝食べるのはクロワッサン
瀕死の記事を読みながら

「すべては愛、残りは誤算(tout est amour すべては愛、の意)」
愛がすべて、あとは誤算
私たちの最後の花火も静かに消えてしまったもの

「宿無し女(Clocharde ホームレス、の意)」
すっかり意気消沈した私はドブに捨ててやったのさ
住所録だのなんやかんや(中略)
愛だよ愛 愛さえあれば貧しくないのさ

「シリコンレディー([Silicone](#) lady)」
私は女のロボットです(中略)
でもこれは、貴方達の子供の歌なのです

「私は人の子」では、「死体の肉を食べる」という異端者が登場する。しかし、それ以外は私はみんなと同じであると主張する。

「すべては愛、残りは誤算」、「宿無し女」は、薩と詩人のウィリアム・クリフとの連名で作詞された。一見、ありきたりな恋愛の歌に見えるが、クリフが同性愛者であり、同性愛に関する詩を発表して文壇から非難された人物であることを知れば、この歌詞が「異端の愛」を歌ったものであるのがわかる。

しかし、日本人である薩の異端者意識が最も表れているのは、「シリコンレディー」である。この歌詞は物語形式になっている。

女のロボットは美人で頭脳明晰。製作者である博士は嫉妬して、彼女を殺そうとするが返り討ちにあう。その後、財界人たちが彼女の配偶者を作ろうとやっきになる。

こんな話をお信じにはならないでしょう、「でもこれは、貴方達の子供の歌なのです」という一言で物語を締める。

女のロボットが、人間社会を支配し、しかもそれは未来で生まれてくる自分たちの子供である、とうそぶいているのだ。

さらにこの楽曲には、注目すべき点がある。

この一曲のみ、東京のスタジオでレコーディングされ、編曲者が[YMO](#)の[細野晴臣](#)であることだ。日本人の薩が書いた、女のロボットが世界を支配する詞を、日本人の細野が当時の流行の最先端である[テクノサウンド](#)で編曲して完成した異端者による楽曲をもって、彼女はフランスの音楽市場に勝負を仕掛けたのである。

この「シリコンレディー」は、「移民には地獄」のフランスにおいて、彼女が日本人として、また[シャンソン](#)歌手として生きていくための鎧となった。
アンティークの衣裳に身を包んでテクノを歌う「薩めぐみ」のスタイルは、プレヴェールの過去、トポールの現代性、彼女自身の異端者として生きる覚悟をもって、完成したのである。

シャンソンという鎧—薩めぐみ V(完結)

薩めぐみは、自身が作詞し、[細野晴臣](#)がアレンジしたテクノ調の楽曲「シリコンレディー」によって、移民として、そして[シャンソン](#)歌手として生きる鎧を手に入れた。

この鎧が最も効果をもたらしたのは、1986年発売の4枚目のアルバムの表題曲「Give back my soul」(作詞者は薩)である。

IT WAS IN 1995 AT THE LAKE OF SENEGAL A GIANT RAPED ME,
CHANGED ME INTO A LOVE MACHINE
MY HEART DOESN'T BEAT ANYMORE
MY BLOOD DOESN'T FLOW ANYMORE (中略)
I WAS A LOVE MACHINE
(GIVE BACK MY SOUL)

1995年、私は[セネガル](#)の湖の巨人にレイプされた。

私は、肉便器に成り下がった。

私の感情は失われてしまった。

私は冷血になった。(中略)

私は肉便器だった。

(私の心を返して) (峰訳)

この歌詞を読み解くと、発表されたのが86年であるにも関わらず、「IT WAS IN 1995」と未来の出来事が過去形で記されている。よって、このストーリーは架空のことであることが示される。しかしこの生々しい歌詞からは、[シャンソン](#)を通じてフランスで生きるための鎧を纏った薩が歩んだ半生が、[ドンキホーテ](#)のごとき「[花咲ける騎士道](#)」ではなかったことが伺える。彼女のなかでは常に「心をレイプされる」不安に怯えていたのではないだろうか。

一方でこの歌詞は、読み方によっては自分語りのヒロイズム、被害者意識として捉えられかねない脆弱さがある。しかし見ての通り、彼女はこの歌詞を英語で記している。フランス語や日本語ではない、自身のバックボーンによらない言語である英語を用いて歌ったことが、異端者としての薩のプライドの表れであり、歌詞の[脆弱性](#)を克服している。

この歌詞は激しいテクノ調に編曲され、薩は喘ぎ声や首を絞められたような奇声を上げたり、床に倒れ混んだりしながら歌っている。従来の彼女には見られなかった、ある種の狂気を感じずにはいられない。

ところで、我々が薩について興味を持ったとき、検索に用いるのは[YouTube](#)だろう。しかし[YouTube](#)には「Give back my soul」までの映像は多く投稿されているが、それ以降の楽曲があまりないことに気づく。つまり、86年までの彼女の姿がそのまま「薩めぐみ」という歌手のイメージとして固定されてしまう可能性がある。

彼女を真の姿を知るためには、86年から死去する2010年までの楽曲も見なければならぬ。

とはいえ、86年以降はオリジナルアルバムはほぼ製作されていない。何枚かのライブ盤が発売されたのち、

2005年『CHANSONS LITTÉRAIRES DES ANNÉES 30 Reissue(1930年代の文学的[シャンソン](#))』

2009年『Après ma mort(私の死んだ後)』
の2枚が発売されたきりである。

(この2枚については、他稿参照のこと)

ところで、私は彼女が「詩の世界を生きた人」とであると認識する。
ひとつ、それを裏付ける楽曲を紹介したい。2002年に発売された、音楽評論家の永瀧達治プロデュースによるアルバム『[暗い日曜日](#) トリビュート』の収録曲だ。
このアルバムは、1936年に[シャンソン](#)歌手、ダミアが歌った「Sombre Dimanche([暗い日曜日](#))」を10組のアーティストがカバーしたものである。

私はいつか日曜日に死ぬだろう(中略)
怖がらないで、恋人よ
瞳があなたを見ることができなくても
瞳が語りかけるのよ
私は自分の命よりもあなたを愛していたと
[暗い日曜日](#) (永瀧訳)

このアルバムに参加した薩は、アコーディオニストのダニエル・コランの伴奏に合わせて歌詞を朗読する。あえて歌わず、抑揚と情感を込めた肉声をもって歌詞の世界を紡ぎ出すパフォーマンスは、[表現者](#)として生きた彼女が至った境地である。
この「[暗い日曜日](#)」こそ、薩めぐみの真の姿が表れた楽曲だと私は思う。

結びとして、薩めぐみの激動の生涯の原動力を探りたい。
彼女がプレヴェールのアルバムをもって日本公演を催した際、自身のバイタリティーは「道産子の開拓者精神」と述べている記事を見つけた。
彼女の出身地である札幌は、明治以降に[開拓使](#)が原野を拓き、西欧の都市モデルを再現したフロンティアである。従来の日本の風土にはなかった西洋建築や欧米の植物を根付かせ、近代日本という新しい時代を「まちづくり」によって創造した過程は、薩の生きざまそのものに思えてならないのだ。
日本とフランスの異文化を、自分のなかで相互に結びつけ、新たな文化のスタイルを作り出した[表現者](#)として活躍した彼女の生きざまは、まさに開拓者精神の強さに裏打ちされていると言えるだろう。

そして、これは現代のグローバル社会を生きるものとして、あるいは[シャンソン](#)を愛するものとして、自分はそれらをいかに捉えて表現や紹介をしていくか、という私自身の問いに帰結するのである。

(画像は『[暗い日曜日](#) トリビュート』のジャケット、晩年の薩、薩のインタビュー記事)

完

MIEGUMI SATSU

薩 めぐみ



Photo Eric Feuilherade

プレス記事